628
124
伐木
黃原子著

我仰天子に問ふ、何とは何ぞ、とッ拍子もなき一字外題、尋常の白粉くさき變愛小説とはあらざるべく、はた涙を命の悲哀談にもあらざるべく、殺伐なる軍物語にも、勇ましき侠客話にもあらざるべし、斯く疑問を意味するからは、或はそれ探偵談なるべきかと。仰天子曰く、否。さらば妖怪小説か。否。さらば何。彼忽ち莞爾として、果して然り、形の如き疑問を起させん事を願ひて。題を撰むに苦しみしなり、故に好奇の心を以て、何と乗地に問はるれば、すなはち作者の望足れりと言ふ。望足りたらば言へ。否・言難しとて遂に言はず。我も遂に怫然として、好し、此上は問はじ、我自ら讀了へて、何の何たるを知らんと言へば、彼手を打ちてどつと哄ひぬ。あゝ死なしたり、我愚にも、奇題を設けて強ち人に讀ませんとする彼の術中に陥りしなり

明治三十四年の冬

烏有先生識

何仰天子

第一

東京淺草の清島町に、楞嚴寺といふ大きい寺がある、住持を歸翁僧正と言つて、極健かな白眉の老僧だ、深い學問はないさうだが、持戒堅固の名が高いので、檀家の信仰はいふまでもない、法德の優れた尊い聖だと言つて、他にも歸依をする善男善女が夥多しい、で、日々の收納が少くないから、自然內福だといふ評判がある、歸翁僧正は性來器用な質で、法務の暇には細工に耽つて、居間にある机から書棚から、手の籠つた茶筅筒迄もみな自ら作つたので、職人跣足といふほどに出來る所から氣乘が爲て、今年六十の我が姿を殘したいと、高さ二尺の坐像の自作を思ひ立ち、清らかな

居間を木屑だらけに爲て、今專ら彫刻の最中だ

心安立に此處へずつと入つて來たのは、佐々彦左衛門と言つて、四十四五の太つた和かな男だ、この寺の檀頭で、檀家總代を勤めて居るのだ

僧正はそれと見て「おう佐々さんか、例の通り引散けて居て」と木屑を拂つて立掛けた、「あ、お住持樣、そのまゝ、どうかそのまゝ」僧正は「はいはい」と言ひながら遂に立つて、袈裟法衣を着けて挨拶を爲た、この人は何日でも斯うで、威儀を正さなければ人に逢はないのだ

餘り御無沙汰をいたして居りますので、今日は墓參を兼ねまして、些とお伺ひ申しました「む、その墓の事で思ひ出した、妙諦がお前さんに逢ひたいと言つて……

この時丁度妙諦が來た、矢張り如法に袈裟法衣を着けて居る、是は僧正の高足の弟子で、三十餘の色白の美僧だ、檀家や近邊の浮氣女は、某役者の演た清心宵似だといつて、今清心といふ綽名を付けて居るほどだが、嚴

格な師の坊の薫陶を受けて居るから、年にも似ず悪い噂は少しもない、だから信徒が僧正同樣に崇めて居る、けれど中には歸依の度を過して、法衣の袖を引いた女が何人と知れないほどだが、更に見向も爲ないさうだ

佐々さん、丁度お目に掛りたいと思つて居ました、本堂の裏手にある隱居所の事ですが、昔は十四五人も居た寺に、今はわづか四人のみで、庫裏と書院とだけでも廣過ぎるのですから、彼日僧正が御隱居をなさるに爲ても、あの隱居所は不用ですし、御寛の通り閉切つて置きましては、家の爲にも能くあるまいと存じますから、いつそ貸家に爲てはどうでせう、墓場が傍にあるので不都合ですが、それはまた考がありますし

僧正は都ての寺務を妙諦へ任せてもあり、又世事に拘るのが厭なから厭、二人の話が始まると、己が木像の方へ捻向いて、悪い箇所を見付け出して

は、刀を取つて直して居る

彦左衛門は頷いて「成程、妙諦樣、それは至極好い思召でございます「け

れど清浮な寺の境内へ、俗人を住ませる事は好みませんから、今の裏門を貸家の門に爲て、そして墓場の見えないやうに、門から堂のすぐ後で、一文字に高い板塀を拵へるのです、さうすると區廓が正しく付きますし、寺へは一切往來の出來ない事になりますから、此方でも煩くなし、またあの家でも墓場が見えなくなるのですから必ず借人があらうと思ひます、斯うすのも家賃が欲しいからではありません、たゝ建朽にするのが惜しいからです、就いては貴君に御差配を願つて、家賃も御勝手にお極めなすつて、その金も預つて置いて貰ひたいのです、寺では別に入用もありませんから「いや、慾をお離れなすつた御境界でございますから、借家人と家賃の應對なぞはお厭でございませう、承知いたしました、萬事私が取計ふでございませう「それではどうか宜しいやうに「はい、お寺へ出入の大工を呼びに遣はしまして、一應見積らせました上で、すぐ明日からでも掛らせますでございませう

第二

佐々彦左衛門の宅は、四谷の荒木町にあつて、別莊風の手廣な構だ、銀行株やら鐵道株を澤山に持つて居るから、別に勤があるのではなし、商賣を爲て居るのでもないが、豐な生活を營んで居るのだ

「御免下さいまし」と舒かにいつて、佐々の玄關へ訪れた者がある、色白の年增で、薄痘痕はあるのだが、更に醜うはなし、且優しさうな、品の好い女だ、小紋縮緬の小袖の上に、五つ紋の黑七子の被布を着て居る

取次に出た下女が、清島町の家の事で來たと聞いて、奥へ入つて主人に告げた

彦左衛門「さうか、もう來たか、あの家の事はまだ丈助にも話してないのだから……好し、己が直々逢つて遣らう」と直樣玄關へ出て「貴女はあの家を借りるお積で入らしつたんですか「はい「それは遠方の所御足勞で

した、實は餘り隔たつて居ますから、あの邊で假の差配人を極めやうと思つて居ながら、まだやう〳〵昨日修羅が出來た所ですから、ついそのまゝに爲て居まして、とんだお氣の毒な事でした「どういたしまして、あの家賃はお幾許ほどで「はい、家賃に付いては少々お話があります、能く御覽なすつたらうが、あの家は楞嚴寺樣の御先代が隱居所にお建てなすつたので、木柱が好い所へ持つて來て、間毎々々の御普請が行屆いて居ます、と言つて寶物に花を飾るのではありません、私は馬鹿正直だから、惡い所も隱さないで言ひます、まづ下の玄關が二疊、次の間が三疊、茶の間が四疊半、奥座敷が八疊、それから二階が三疊と六疊とで、湯殿までが付いて居て、前の庭が好なやうに出來て居るんだから月二十圓の値打はあります、或は二十五圓が相場かも知れない、だが大きな御本堂へぴつたり喰付いて建つてるんだから、陰氣な事は陰氣です、それにね、楞嚴寺樣の墓場だけは、高い板塀で仕切りましたから、今は少しも見えませんが、何分お寺の

多い土地だから、あの門の前の細い道の兩側は、前通と後通との寺々の裏尻になつて居ます、それゆゑ墓場ばかりが長く〳〵續いて居て、あの邊で家と言つたら、あの家一軒切だから、極々淋しい所です、だから家賃は安くして十五圓、敷三十圓と極めました「それは存じたよりはお安うございます「さうですか、私もさう思ふんです、あのお寺は金を欲しいなんぞのお心は少しもないんで、たゞ明けて置くのは勿體ないといふ所からお貸しなさるんだから、もつと安くしても好いんですが、外の檀家の思惑もありますから、まアそれ位に爲て置くのです「ぢやア妾へお貸を願ひます「お望からお惜り下さい、其處でお名前は……「關初音と申します」「それは貴女のお名でせうねえ、御主人のは「いえ、夫は前年死りまして、只今では妾が主人でございます「ぢやア親御さんや御兄弟でもお有りなすつて、御一所にお住居ですか「いえ、眞の一人身でございます、最も下女は置く積でございますが、「へえー」と彦左衛門は驚き顏で「これは私の親切で申すのです

が、あの淋しい所でお二人切では……「お詞は有難うございますが、妾は變人でございまして、淋しい所が好でございますので「それに爲ても、お二人切では廣過ぎませう「實は貴君、お茶や花の指南を、いえ、ほんの手解だけでございますが、女の弟子を取ります積で「成程、それだと廣過ぎも爲ますまい、ぢやァいよ〳〵お貸し申しませう「有難うございます、左樣なら兎に角數金を」と初音は卽座に三十圓の金を出した

第三

女宗匠の關初音は、今日楞嚴寺裏の家へ引移つた、所が前日から口入屋へ話して、必ずこの日から寄越してくれると言つて置いた下女が、夜に入つてもまだ來ないので、自分で近邊へ買物に出て、魚久といふ小な魚屋へ入つた

主人の久藏といふのは、折節出前持を叱り付けて、口汚く罵つて居たが、

お客と見て俄に笑顔を造り「入らつしやい」と腰を屈めた

「あの、此方で仕出が出來ませうか「へい〳〵、致します「ぢやァお刺身と煮魚と椀盛とを二人前、楞嚴寺樣の後で、關といふ家ですから「へえ、あのお家で、宜しうございます、早速……」初音は急ぎ足で歸つて行つた

妻のお舟といふのが、內から覗いて居たと見えて、初音の去るのを待兼ねた風で飛出し「大層美しい、そして品の好い御新造さんねえ「さうさ、あれで痘痕がねえてへと「おや、有るの、內からは見えなかつたが、惜しいもんだねえ、玉に瑾といふだらう

久藏は煮付や椀盛にする魚を切つて、お舟に渡して、自分は刺身を造り始めた、お舟は襷掛で焜爐の下を煽ぎながら「ねえ、世間は廣いもんぢやァないか、あんな墓場の中へ越して來る人もあるんだから「ほんとに世間は廣えもんだ、彼處が貸家になるんだと聞いて、場所が惡いから借人はねえだらうと思つてたんだが、もう有つたんだから寄體さ、物好な人もあつ

たもんだ

「己等ァ厭だ」と出前持が不意に詞を挿んだ、名は爲吉と言つて、今年十八の個強な若者で、ついこの頃近在の瀧の川から拳公に來たのだ

「へッ」と久藏は嘲笑つて「身體ばかり大きくつて、仕樣のねえ臆病な手前だ、先方から金をくれたつて……」爲吉は意氣地なく俯いて「全くさ、己等ァ厭だ、彼方から家賃が出ても一日も厭だ「はゝゝゝゝ、手前のやうな臆病な奴もまた珍しい、どうせ何だらう、臆病の番附でも出來るてへと、手前は横綱の大關だらう爲吉は今度は顔きは爲なかつたが、無理のない見立だと思つたのか、別に抗ひも爲ないで居る

兎角する間に料理が出來上つたので、お舟は一々大きな岡持へ取入れて「さァ爲、汁物があるんだから、溢さないやうに氣を付けておくれ」爲吉は至極迷惑といふ顔付で「こんな事言つちや濟まねえんだけれど、なァ親方」と久藏の方を向いて「御詰だからお前さん持つてつておくんなせえな、あの寺裏は何だか怖なくつて、畫間だつて通つた事がねえんですから

「この野郎、好い若え者の癖に爲やァがつて「ぢやァお内儀さん、お氣の毒だけれど、一所に附いて來て下さらねえか「えゝ、お巫山戯でないよ、ぐづ〳〵爲て居たら椀盛が冷めるぢやないか、早くお爲なね

爲吉はもう是非がないので、岡持と提燈とを持つて家を出たが、寺と寺との裏尻の細道へ差掛ると「あゝ何だか氣味が惡い」と兩側の墓原を見ないやうに俯向いて、東雲節を中音で附景氣「さりとは怖いね」と酒落て見たのだが、自分の頭聲が自分が凄いやうに聞えてか、そのまゝで口を閉して足を早め、逃込むやうに關の門を入つたが、忽ち後へ身を退いて「こりやァ變だ、何だか血醒えせ、お化でも出なきやァ好いが……おや、燈光が點いて居ないやうだ、誰も居ねえのか知ら

氣味惡る〳〵格子戸の前まで行つて「お待遠さま」と大聲で言つたが、返辭がないので「矢張り誰も居ねえんで「それに血醒さが酷くなつて來た

やうだ、いや、此方の氣の所爲かも知れねえ」と勇氣を奮つて格子戸をがらりと明け、まづ提灯を差入れると、まことに思も寄らない大珍事、直その土間に女が殺されて居たので、臆病者の爲吉は堪らない「あッ」と叫んで打倒れて、そのまゝ氣絶を爲て了つた

第四

爲吉は暫くすると息吹返して、燈光の消えた提灯を提げ、無一無三に走り出して、主人魚久の店へ横斜向に駈込み、どうと上口へ腰を落したが、一言もいはないで、拳を上げて頸に胸を打つばかりだ

久藏は頭から噛付くやうに怒鳴立てゝ「やい、手前何處へ行つてやァがつたんだ、あの家が三里も先へ引越しやァ爲めえし、出てから一時間にもなるのに、今まで何を爲てやァがつた」お舟は小首を捻りながら「久さんお待ちよ、何だか變だよ、まァ御覽な、顏は眞青になつて居る、身體も泥

だらけさ、それに提灯も消えて居るし、岡持も置いて來たよ「む、成程さうだ、爲、ど、どうしたんだ、若や喧嘩でも……いや、喧嘩の一つも爲て來るほどだと藥勢だが、手前にやァそんな氣の利いた事は出來ねえ、大方何だらう、打擲られ損で逃げて來やァがつたんだらう

爲吉はやう〳〵口を開いたが、まだ顏蒼で「あゝ怖かつた、命を縮め了つた「馬鹿め、到頭臆病神に取付かれやァがつた「親方、さうぢやァねえ、先刻來た御新造さんがさ、彼處の土間で殺されてるんだもの「へゝ、何を言やァがるんだ、さう無暗に人間が殺れて居て堪るもんか、怖いと思つたら提灯も人魂に見える理屈だ、手前は何か見違へて來やァがつたんだ、さうに違へねえ「ぢやァ親方見て來な、斯う踏反返つて殺されてるんだもの、それだけぢやァねえ、まだ入らねえ門の所で、もう血腥かつたんだもの「むゝ、手前が其處まで言ふんだと、本統かも知れねえや、そして手前どうしたんだ「どうしたんか覺はねえけれど、今氣が付いたんで歸つて來たんさ

「岡持はどうした「それはどうと打倒れる時、格子戸の外へ置いたやうだ、それだけは薄すり覺えて居る

「久さん」とお舟は傍から呼掛けて「爲の言ふのが本統だと、屆けなくちやならないだらう、若かこのまゝ黙つて居て、後で掛り合になつちやア大變だから、ねえ「そりやアさうだ、爲、手前見た通を言つて、彼處の交番へ屆けて來な「厭だ、今夜はもう出る事は御免だ「なに、遠い所ぢやアなし、今行つた家の前を通り抜けりやア直ぐやねえか「いや、親方の言付だけれど、あの寺裏の道ばかりは、もう二度と再び通らねえ積りだ「ぢやア大迂回だけれど、楞嚴寺樣の前から回つて行きやア好い、今屆けて置かねえと、後でまだ〳〵怖い目に遇ふだらうせ「さうだらうか、ぢやア仕樣がねえ、大迂回をして行つて來やう「そして爲、手前が屆けるてへと、直巡査が行くだらうから手前も一所に付いて行つて、岡持を取つて來な、御新造さんが殺されて了つたんぢやア、どうせ魚を喰ふどこぢやあるめえから、

あのまゝで持つて來るが好い「またあの家へ行かねえぢやあらねえかなア「巡査と一所だ、何が怖い「だつて歸りが淋しいや、一人だもの「まだあんな事言つてやアがる、早く行けよう

爲吉は遂に巡査の派出所へ行つて、現に見た事實を斷へた、すると鬼の巡査が爲吉を召連れて、現場へ臨んだが、扨も不思議な、有るべき筈の死骸が無い、それに似寄の物さへ無かつた

第五

特巡は呆れ顏で、土間へ入つて提灯で見回しながら「こら、おい、誰れも殺されては居ないぢやないか、む、見ろ」爲吉も呆れ顏で「奇體だなア「全體何處で殺されて居たんだ、まアそんな所に居ないで此方へ入れ

爲吉は氣味が惡くつて入れないのだ、巡査に强ひられてもまだ外に立つて居て「その土間です「ぢやアどんな風に爲て殺されて居た「斯う仰向に

なつて、頭を此方の方に爲て「はア、頭を入口の方に爲て仰向に」と巡査は念を押して、じつと考へる風だつた、爲吉は頸に後の方を氣に爲て、怖さうに見返つてばかり居る

巡査は氣を換へて「何しろ此處に居ないのでは、内へ引上げられたのかも知れない」と言ひつゝずつと上つて行つた

爲吉は入るのは怖いけれど、外い一人殘されて居るのはなほ怖いので、是非なく入つて、踵を返うて上つて行つたが、自分の踏んだ上口の板間の音に怪え上つて、巡査の身體へぐつと取縋つた「えゝ、何をするのだ、怖りするわ

上つた所は二疊で、其處には血の滴もない、その正面に二階へ上る段階子になつて居る、さて二疊の右は三疊で、一間の押入には、粗末な夜具や雜物があるばかりだ、その次が四疊半で、火鉢の外には何物もない、奥座敷の八疊も同樣で、其處の二間の押入も、澤山な花器や茶道具が目に入るのみだ、その他湯殿にも勝手元にも便所にも、些と小廣い庭前にも死體が見えない、で、また引返して二階へ上つた、口の間が三疊で、一間半の押入を明けると、立派な絹夜具や箪笥鏡臺の類が入つて居て、怪しい物は見當らない、奥の六疊には一間の床の間、それと並んで一間の違棚、その下に地袋がある、如才なく地袋の中も見たが、更に一物もない

「どうも奇體だ」と巡査は訝りながら、遂に下へ下りて行つた「奇體だなア」と爲吉も慌てながら付いて下りたが、親の敵見逃してはと言ふ體で引添うて居る

「貴樣何か間違へて居るのぢやないか、殺されて居たといふのは外の家だらう、何處か外と間違へて居るに相違ない、え、さうだらう、この家ではないやうだぞ「いえ、そ、そ、そんな事……この家に違へねえんです、此處等にやアこの家一軒切だもの、間違へやうたつて間違へられや爲ねえ「さう言ふがね、どうも此處ではないやうだ「だつてお前さん、何だもの、已

が打遣らかして行つた岡持が、ちやんと此處にあるんだもの「それは何處に「其處にさ、この格子戸の外に

巡査はずつと出て見て「む、成程、餘り怖がつたんで、是を打遣つといて逃げたんだね「さうです「ぢやアこの家に違ひなからうが」と言ひさして、門内を隈なく見回つた、新しい板塀も、庭前と隣の寺との境界になつて居る塵の高い生垣も、白壁途に爲てある本堂の裏手もみな見た、けれど更に異狀がないので、まだ格子の内へ入つて、板間の板を上げて床下を覗いたり、天井を捜つたり爲て、遂に土間にあつた下駄箱の履物へ目を付けた

この時から〳〵と數輛の人力車の音が爲て、淺草警察署の警部が、派出所からの非常報知に依つて、制服の巡査一人と、角袖の巡査二人と、警察醫とを從へて出張して來た

第六

巡査は入つて來た警部を迎へて「どうも餘程變なんでございます、殺人事件があると申すので、早速出張いたしましたが、更にその模樣がありません、殺されて居たと申すのは其處ですが」と格子の外から土間を指した

警部はずつと寄つて内を見ながら「それは不思議だ、君は誰から殺人事件のある事を聞いたね「はい」と爲吉の方を見返つて「あの者は魚久と申す魚屋の雇人で、今日この家へ引移つて參つた者から誂がありましたので、その料理を持つて參ると、先に誂へに來た女が殺されて居りましたと申す事で、派出所へ訴へに參りましたので「そして君が是へ臨んで見ると、その死骸が無くなつて居たと言ふんだね「左樣でございます、倒れて居た場所はこの土間ださうですが、若や兇行者が取隱しは爲ないかと、二階や下は申すに及ばず、天井の上から床の下までも調べましたが、死骸らしい物もありません、若や他へ躲しは爲ないかと、外へ出ても調べました、御覽

の通り、家の後は高い堂へびつたり付いて居りまして、この家の屋根からでも見上げるばかりでございますから、あの方からはどうする事も出來ません、この板塀は一兩日前に普請が出來たばかりで、萬一死骸を越させしたら、何か跡が殘らなければなりませんが、猫の掻上つた爪痕もない位、また一方は極茂つた極の垣根で、引明けやうにも引明けられは致しません「ぢやァ門外へ運び出したんだらう「いえ、その樣子も見えないのでございます、併し消えて無くなるといふ道理もございませんから、まづそれとよりは思はれません「殺されたのは殺藏位の女だつたか「二十五六だと申す事で「その者の外に、この家には誰も居ないのか「はい、全く殺された者一人暮しだらうと存じます、夜具は二通ございますが、一組は客用と見受けます、不斷に用ひるらしいのは一組だけで、また履物も二十五六の女の履きさうなのが、足駄と駒下駄と二足あるばかりですから「成程、で、その女の名前なり職業は、それが今日越して參つたばかりでございますから、

殘念ながら都て分りません、併し此處は楞嚴寺の持家でございますから、彼處へ參つたら分るでございませう、早速……「あ、君は行つて大略話して、住職の者を此處へ呼んで來てくれると好いね、併し僧正を呼ぶのも、何だから、執事の僧を「はい」と答へて髯巡査は出て行つた

爲吉は少し馴染になり掛つた人に出て行かれたので、すぐ跡ていへりたいやうな顏を爲たが、多勢の傍が心丈夫と思つたか、そのまゝじつと差控へて、警察醫の後へしよんぼり立つた

角袖の巡査二人は、髯巡査の詞を傍から半分はど聞いたばかりで、示し合せて土間へ入つた、一人は六尺有餘の背高で、一人は酷く痩せた男だ、背高巡査は提灯で下を照らして「君、どうだこら、大層土間が濕れて居る

痩巡査は早速四邊になつて、土へ鼻を付けながら「いや、血の匂は爲ない、こりや水だ「おや、この上口の板間もびつしより濕れて居る、だが血

を落したんぢやァない、今日越して來たといふんだから、水を流して洗つたんだらう、是で見ると、どうも甚だ腑に落ちないが、事實殺されて居たのから、外へ持出したんだねえ」「さうだらう、行つて見やう

共に門外へ行つて、道々注意して歩きながら、一方の往來へ出て、其處の店屋に就いて糺したが、怪しい者は寺裏から出なかつたと言ふので、また引返して門前を通り越し、他の一方の往來へ出て、其處の派出所で聞いて見たが、今夜は寺裏から一人も出て來なかつたと斷言した、で、これでは外へも持出さないといふ事に極まつたが、扨いよ〳〵譯が分らなくなつて了つた

第七

美僧妙諦は正しく袈裟法衣を着て、玄道といふ十八になる小僧と、腰の曲つた下男とを從へ、騎巡査に誘はれて楞嚴寺を出た

さて平生信仰の輩は違つたもので、向側の煙草店の色娘が、夜目にも素早くそれと見て「おや、清心さんだ」と言ひながら駈出して、五六軒も先の八百屋へ御注進に及んだ、其處の赤い手柄の嫁が「まァ珍しい、今日で十日目さ、常はちつともふ出なさらないんだもの「あら、違つてよ、妾所はすぐ御門前だもの、能く知つてるわ、今日でお前さん十一日目さ」するとまた隣の桶屋の若後家が馳加はつて「お前さん方は氣樂な事を言つてお出でだが、まァ御覽な、巡査が清心さんを連れて行くんだよ娘「ふやさうねえ、まァ大變、何故だらう 嫁「あの清心さんが惡い事をなさる譯はないんだが、何か間違つた事でも出來たんだらうか 後家「若か警察でお留置になりなさるやうだと、みんなで歎願に行かうかねえ

妙諦は彼等に見られるのを厭うてか、脇目も振らず足を早め、我が寺の裏尻へぐるりと回つて、例の貸家の門を入つた

警部はすでに從へて來た制服の巡査に命じて、四疊半の間にあつた洋灯

に火を點させ、奥の八疊の間へ通つて、警察醫と話して居た

爲吉は外を一人立つて居る事も出事ないから、怖々歸り掛けたのだが、まだ御用があるといつて引止められたので、一所にこの間へ入りは爲たけれど、窮屈千萬といふ面持で、下座の隅に小くなつて畏つて居るのだ

警部は妙蹟が來たと聞いて、早速我が前へ呼んで「怪しからん珍事が起りまして……お聞きでしたらうねえ」と穏かにいつた、妙蹟は威儀嚴重に座つて「はい、只今あの方はお帰りまして、驚いて居るのでございます

此處へ角袖の両巡査が歸つて來た、で、痩巡査が警部の傍に進んで、極小聲で「死骸を持出した形跡は更にございません」警部は首を傾けて「それだといよ〳〵奇怪だ、外の物を死人と見違へたのではあるまいか」痩巡査、私もこの魚屋の若者が、家を間違へたんではなからうかと存じましたが、先に逃出した時置忘れたと申す岡持が、現に此處の格子の外にございましたから、矢張りさうかと……「そりやさうだ、家を間違へるやうな事は

あるまい、また當家の者が居なくなつて了つて居るのだから、何れ變事があつたのに相違なからう、併し……」と暫く考へて「いや、楞嚴寺さん、兎も角聞くだけの事は聞いて置きたいのです、當家の者は今日引越して來たといふのですが、大家さんの貴寺へ御挨拶に出ましたらうねえ「はい、參りました、貴僧お逢ひなすつたか、女主人ですか「些と逢ひました關初音と申す女主人で、下女の參りますまでは、たゞ一人住居ださうで」痩巡査は自分の鑑定が中つたので、ひそかに小鼻を動かした

「その外初音の身上に就いて、貴僧が御存じの事は、どうか漏らさず仰しやつて下さい「實は斯樣でございます、差配は檀家惣代へ任せてございまして、貸借の應對もその方で致させたのでございますから、寺では家賃の高も存じない位でございます、それゆえ今日本人の挨拶も、別に大家へ對してはなく、近所といふ所で參つたのでございませう、左樣な譯でございますから、身上の事は更に存じませんので「ぢやァその差配は何方です

か「四谷の荒木町で、佐々と申す者でございます「やア、大層遠方だ、些と今急の間には……

折柄若い男を連れて、顔に怪しむ様子で、この間へ入つて來た女がある、それは殺されたものになつて居た初音であつた

第八

爲吉は最も末席に坐つて居たので、一番先に初音を見付けて、黙いたの驚かないのと言ふ段ではない「あッ、ゆ、ゆ、幽靈ッ」と口走つて、堅く目を閉つて突伏した、次に驚いたのは妙蹄だが、是は見苦しい樣はない、爲吉の辭に依つて捻向いたまゝ「關さん、さアどうしなすつた、お前さんの事で大騒が持上つて居るのだ、今まで何處に……

警部は傍から忙しく詞を挿んで「いや、楞嚴寺さん、では何ですか、この女が關初音ですか「左樣でございます」是を聞いて警部を始め、一座の

四巡査、警察醫までも意外の感に撲たれて、互に顏を見合せた

警部はやがて初音に向つて「これ、お前がこの家の借主だね」初音は問には答へないで「まアこれはどうしたと申すのでございませう、どうもどうも驚いて了ひました、妾は何だか譯が分りませんでございます「いや、まづ此方の問ふ事を答へてくれると、早速此方からもまた話すから、その時分る、お前がこの家の借主だね「左樣でございます、關初音と申しまして「一人住居だと聞いたが、その連れて來た男は「これは弟でございます「お前は何時頃にこの家を出て、そして今まで何處へ行つて居たかね「はい、それは始めの方から申上げませんと、お分りになりませんでございませう、妾は今日午後にこの家へ引越して參りまして……「何所から越して來たか「芝の露月町からでございます、そして人足はすぐ歸しましたが、彼方で心安くいたした人が、荷物の宰料を爲ながら手傳に來てくれまして、大層働いてくれましたから、その人の止めましたのを妾が聞きませんで、二人

の喰べます物を仕出屋へ誂へに參りました、その時はもう日が暮れてから
でございます。そして妾が歸つて見ますと、その人が到頭歸つて了つた後
でございました
「些と」と警部は止めて「それは若い女か」「いえ、お婆さんでございます、
六十三になりますそうで、伊助と申して、妾がお金を少し用立てた事がご
ざいますので、その禮心で來てくれたのでございます」「さうすると、お前
はその後また出たのだね」「はい、惜しいやうなお料理ではございませんが、
一人前不用になるのも何だと存じて、不圖この弟の事を思ひ出したんでご
ざいます、これは深谷源次郎と申して、藏前の千束屋といふお家に拳公を
いたして居ります者で、もし引越の日を知らせましたら、御主人へ氣兼を
しながら手傳に參るだらう、それが可哀さうだから、後で端書で、と思つ
て居りましたが、夜は餘り御用もなからう、丁度呼んで來て一處にと、些
と戸を引寄せて置きまして、直に出て參つたのでございます「成程、そん

な事か、いや、能く分つた、序だから聞くが、姉弟で居て苗字の違ふのは
「はい、深谷は妾の實家の名で、そして妾は關と申す家へ縁付きましたので
警部は二人の顏を見較べつゝ頷いて、さて、この騒の爲吉から起つた事
を言つて聞せた「おや、まア、何故また左樣な」と初音は身を慄はせて不
氣味がるに共に、深く怪を抱く風だ
巡査は後から「念の爲に聞きますが、土間や板間が酷く濕れて居たの
は、どうしたんです「あれは貴君、こんなに汚れて居ては拭いた位では可
ないと申して、手傳に參つた人が、無暗に水を掛けて洗つたのでございます」
巡査はさもこそといふ體で、共に調べた背高巡査を見返つた
警部は「こら」と爲吉を見て「この家には何の疑ふ所もないのだ、全く
其方が怖い夢でも見たのだらう、是へ出い」と呼立てた

第九

爲吉はは一と首を縮めて後退を爲た、警部は横けて「そんな遠い所では」と言つて置いて、巡査を見返り、大急で警察署へ歸つて、すぐに裁判所へ急報の爲てあるのを、判檢事の出張しない内に取消す手續をせよ、と命じた

爲吉はこの間に一尺ばかりも膝行つて出て、心配顏で警部の顏を見守つて居る、警部はやをら爲吉の方へ向直つて「お前は何をどう見違へたのか、殺されたと言つた人が歸つて來たのだから、お前の見たのが眞實なら、他の女であつたらう、併しそれならば——よし死骸は何處かへ持つて行つたにしても、少しは痕が殘つて居なければならんのに、お前も見たり聞いたりして知つて居る通り、更にそんな樣子がないのだ「それが奇體なんですよ、へい「たゞ奇體とばかり言つて居ては困る、叱りは爲ないから、お前が慌てゝ何かを見違へたのなら、その通りにはつきりと言ふが好い「いえ、そんな……見違へや爲ねえんです

警部はぢつと見詰めて居たが「この者は分らない」と巡査を見返つて「これは魚屋の雇人だね「左樣でございます「どうか爲て居るやうだから、主人に聞く必要がある、君、直行つて魚屋の主人を……

久藏は間もなく巡査に誘はれて來たが、初者の其處に居たのを見て、大層驚いた樣だつた、警部は事の大略を言つて聞かせて「この若者は至極壯健らしく見えるが、何か病氣でもあるのか「いえ、殺したつて死なねえはどの奴で、病氣なんぞは有りやァ爲ません、ぢやァ此奴が何か見違へたんです、へい、それに相違ねえんで「お前もさう思ふか「へい、始めからどうせそんな事だらうと……「親方、さうぢやねえんだよ、己等が彼處で確に見たんだから「えゝ、まだそんな事言つてやァがる、こ、こん畜生」と久藏は平手を上げて、厭といふほど爲吉の横面を擲り付けた

警部「そんな手荒な事を爲ちやァ可ない「だつて旦那、此奴が有りも爲ねえ事を言やァがつて、こんな大騒をさせやァがつたんですから……實は

何なんですよ、此方の御新造さんが殺されてらつしやると言つて、青くなつて歸りやァがつた時、馬鹿め、さう無暗に人が殺されてゝ堪るもんか、怖いと思やァ提灯も人魂に見えらァ、と叱り飛ばして遣つたんです、へい、此奴は常から無類飛切て臆病な奴なんで、「はゝァ、平日からそれほどの臆病者か」へい、全くなんですよ、十八にもなつてやァがつて、お前さん、夜便所へ行くのが怖いんです、何時だつて一人で行つた事がねえんで、内の奴が行くのを待つてゝ、一所に付いてくてへ奴ですもの、こんな野郎は餘りありませんや「さうか、それでは成程……「だから何を言やァがるんだか、此奴の言ふ事は當にやァなりません、あ、さうだ〳〵、今日靈門附の浜花節が來て、四谷怪談を語つて、お岩さんの幽靈の所を遣つてたのを、此奴が怖ながらも聞いてましたつけ、それで怖い〳〵が胸にあるもんだから、格子を明けた所へ猫でも出て來たのが、此奴の目に人が殺されてるやうに見えたんでせう「ひゝ、成程、どうせそんな事だらう

遂にこの殺人事件は、大臆病者の爲吉が、自分の臆病から有りもしない幻影を見たのだ、と言ふ事になつて了つた

第十

あの關の家はたゝさへ搗所が淋しいのに、間違ではあつたけれど、引越して來たすぐその夜、主婦が殺された事になつて、警部までが出張したはどだから、氣丈らしい女だが、決して一時も居付くまい、今夜の内に親類へでも逃出すだらうと、魚久は勿論、派出所の巡査でさへ噂を爲て居たのだが、初音は更に頓着に掛けないと見えて、翌朝自ら門の柱へ折釘を打付け、茶道生花教授の看板を掛けて、屈强な男共の肝を挫いた

その日の十時過の事で、口入屋の内儀が、よぼ〳〵した老婆を連れて出て來て「御新造さん、昨日と申すお約束でしたが、此間も申しました通り、近頃は奉公人が少なうございまして、とんと思ふやうなのがありませんの

で……　この人ではお間に合ひますまいでせうか、なるべく年の行つたのをと仰しやつたんで、丁度好い位のお婆さんがあつたんですけれど、矢張り怖い盛の新造のやうにねえ、彼處の寺裏なら御免だ、氣味が悪いなんて言ふんですもの、おはゝゝゝゝ、それでまアこの人をね、お氣に召さないかも存じませんが、些とお初見參にねえ貴女

初音は老婆の方を見て「お前さんは幾歳です」老婆は默つて笑つて居る

内儀が答を引取つて「六十ださうで、年よりは少し老けては見えますが、御用に立たない事もでざんすまいかと……「なに、家は妾一人なんで、深山用があるのぢやアありませんから、この人でも好いでせうよ「併し是は始めからお斷り申して置きますが、耳が少し遠いんでございまして……「いえ、それも構ひません、妾の方はお嬢さん方が入らつしやるんですから、却つてそんな人の方が好いのです、實は今までに若い下女を遣つたこともありましたが、それが情夫を拵へましてね、妾は迷惑を爲たのです、そん

な猥らな家へ娘を遣つては置けないといふ事になつて、お弟子の減つた事があるので、それからは婆やを置くに極めて居るほどですから、少しは耳が遠くつても、そんな人の方が間違がなくつて宜しい「へえ、お天授なもんで、旨くそういふ御主人樣に出喰しまして、この人は幸福です、能く此方樣へ連れて參りました、實は今日までに何十軒となくねえ貴女、お初見參に遣つたんですけれど」と心を許して實殘であるのを自白した

「何しろ居て見て貰ひませう「ぢやアまアお遣ひなすつて下さいまし「そしてお内儀さん、是は口入屋さんへお頼み申すのではありません、別にお頼み申すのですが、妾の方はお茶や花を教へるのですから、お心當がありましたら、どうかお世話を願ひます、併しお嬢さん方ばかりで、男のお弟子は取りませんから「おや、それは丁度好い事を承りました、入谷の日下さんと申すお邸から、お前は營業違だけれど、世間を廣くして居るからと仰しやつてね、その事をお頼みなすつて居らつしやるのです、女のお師匠さ

んはいくらもありますけれど、先方さんは、御大切なお嬢さんの事ですから、御亭主のある方は厭だの、それでは道が遠過ぎるのと仰しやつて、さだ何處のお師匠さんへも行らつしやいません、此方樣ならさう遠くもなし、幸ひ貴女はお獨身ですから、申しだら直お遣はしなさいませう、まア入らしつたら御覽なさいまし、お孃さんは十八ださうで、それは〳〵お美しい事と申したら……

前刻から魚久の爲吉が門前へ來て居て、青褪めた顏をぐつと突出し、一心に目を据ゑて、遠くから格子の內を見詰めて居た

第十一

爲吉は昨夜久藏に引立てられて、關の家より歸つてから、非常に叱り付けられた、まだその時までは何の異狀もなかつたのだが、寢て起きると、はや少し變な調子になつて居た、けれど久藏に急かれるので、一所に川岸

へ買出しに行く事は行つたが、歸つた時はもう目に見えて變であつた

久藏は今始めて氣付いた樣子で「やい、爲、手前は何故さうぼんやり爲てるんだ、朝川岸から歸つて來たら、是を爲て是をすると、ちやんと手前のする事が極つてるんぢやアねえか、今日は休日ぢやねえせ、頓痴氣野郎め」

爲吉は斯う酷く罵られても一向平氣で、草鞋を穿いて土間へ突立つたまゝ、無言で首を左右へ動かし、頸に何か考へる樣だ

「やい、手前はまだ」と久藏は堪り難ねて、例のぼかりと横面を打喰はした、爲吉はひよろ〳〵として立止つたが、まだ考に耽る體で、片手を上げて打たれた所を撫回しながら「何だらう」始めて言つた詞が是だ

「何が何だい「え、さア、それが己等にやアから分られえ「奇う仔細らしい事を言つてやアがるが、手前何を考へてるんだ、よう、爲「なに、昨夜殺されてた女の事さ」久藏は頷いて「む、手前まだあの事を本統だと言つて、それでそんなに考へてるのか、馬鹿は仕樣のねえもんだ、考へて何に

なる、警部さんまでが手前の見違から起つたんだと言つて、もう濟んぢやつた事ちやアねえか、止せ〳〵、臆病い辭に爲やアがつて、厭に剛情張つて可ねえ

爲吉は主人の詞を聞かないで「どうも變だ「へッ、手前の方が餘程變だ、さア、おい手前のする事を伺ねえか「違へねえんだもの、己等のこの目で見たんだもの、彼處の土間で斯う」と兩手を伸して仰向きつゝ「踏反返つて、格子の方を頭にして殺されてたんだもの、それに皆が嘘だなんて……」久藏は板石の上へ荷棚をことんと置いて「爲、もう刻い加減に爲ねえか、水だ〳〵」と言つては見たが、更に耳へも入らない樣子だから、閾れて自分で汲みに行つた

「何だらう、どうしたんだらう、矢張り己等が見違へたんだらうか、猫か何かい出て來たのを、いや、そんな事はねえ、身體中血だらけになつて、確に女が殺されてた、違へねえ、違へねえ」と頷きながら、出るとはなく

往來へ出た

すると足が自然に運ぶ樣子で、寺裏へ行く曲り角の所まで行つて、ずつと關の家の方を見渡しながら、また暫く考へて居たが、遂に二度と再び通らないと言つた寺裏へ差掛つて、とぼ〳〵と關の門の前へ行つた、この時は丁度口入屋の內儀の來て居た時で、爲吉は門の前までは行つたけれど、また格子の內に人の氣配もするのだけれど、矢張り氣味が惡くつて入れないのか、其處に久しく立靈して、現に女の殺されて居たのを、自分が見たに相違ないと信じる土間の方に向つて、遠くから見詰めて居たのだ

口入屋の內儀は喋り疲れて、やう〳〵家から出ると、爲吉がこの體だから「ふゝや、爲さん、お前は其處で何を爲て」と怪しんで辭を掛けた、爲吉を魚久へ口入をして、識つて居る中なので

「え、どう思つても變なんだ「あら、奇體な事を言つて居るよ、何が變なんさ、お前どうか爲て居るのぢやアないか「なに、己等アどうも爲ちやア

居ねんだ、外の奴等がみんなどうかゐてやァがるんで……

内儀は口の内で「氣でも狂れたんか知ら」と言つて「ゐさん、早く歸らないと久さんに叱られるよ、さァ、其處まで一所に」と爲吉を促して、寺裏から無理に往來まで連出した

第十二

久藏は何か頻に呟きながら、洗つた魚を板場へ並べて居る所へ、か舟が内から出て來たので「おう、お前知らねえか、爲の奴を」「いえ、知らないよ、何だか少し怪しいのねえ」「怪しいとも、己が水を汲みに行つてる間に、何處かへ行つ了やァがつた、昨夜の事ばかり言つて居て、どうも樣子が餘程變だ、あんま小心な野郎だから、狂人になりやァがるかも知れねえぜ」

この時爲吉は口入屋の内儀に分れて、のつそり家へ歸つて來た

「やい、手前何處へ行つてやァがつた「彼處へ行つてたんさ、どう考へて

も違へねえ「あ、ぢやァ關さんへ行つて、殺されてたと思つた所を見てやァがつたんだな、仕樣のねえ、まだ疑つてやァがるんだ、そりやァ手前の勝手だけれど、晝日中にさうのそ〳〵歩かれてちやァ、此方が堪らねえや、其處の腸を片付けて、掃除でもゐろ、そして手前の亂雜のねえ樣は何だ、ぐつと帶でも締めて、きり〳〵ゐねえな

「まァ久さん、さうがみ〳〵言はない方が好いよ、餘り言ふと、却つて變になるからさ「なに、もう變になつてやァがるんだ「だからさ、今日一日位は打置つといて、爲の心任せに爲とく方が好いよ、明日は何とも無くなるだらうから……妾は殺されてたのが本統だつたか嘘だつたか、その事は知らないけれど、自分では見たに違ひないと言ふのに、人から言消されて了つたもんだから、殘念でならないんだらう、爲のやうな者でも魂はあるんだからねえ「ふッ、御大層を言ふぜ、そりや己だつて、一寸の蟲にも魂のあるてへ事ァ承つてらァ「あら冗談ぢやァないわれ、爲は聽病だけれ

ど正直者だから、こんなに怪しくなつたんで、それを思ふと可哀さうさ、ねえ爲

爲吉は今もなほ頭を左右に動かして、至極高慢氣に考へて居るのだ

「これ、どうしたんさ、爲、今日はか前を休ませて上げるからね、まアその草鞋を脱いで、上つて横にでもなつてたら好いだらう、さう爲て居たら、ふつと心も靜まるだらうから」爲吉はこの涙深い詞に返辭も爲ないで、外方を向いて居たが、やがてそろ〳〵表へ出た

「まアあれだもの」とお舟は遂に呆れ顔で「妾の言ふ事も聞えないんだと見える、何處かゝ餘程可なくなつたんだねえ、困つたもんだ「お舟、もう好いや、櫂はねえで打遣つとけ、相手にすると腹が立つから」と投出したやうに言つた、久藏も今は當に爲なくなつたのだ、爲吉は今歸つて來た方へまた行つた

「おや、御覽、爲はまた關さんへ行つんだらう、先方樣が御迷惑をなさるばかりで、行つたつて仕樣がないのにねえ「先方樣も御迷惑なら、此方樣も御迷惑だ、直に快くなりやアがりや好いが、何日までもあんなだと、どうか爲ねえぢやならねえ「そりやアさうだけれど、妾はどう思つても可哀さうでならないんさ、些と爲た所からあんなになつて……どうか早く直りやア好いが「なに、直らねえぢやアそれまでだ、己等はあんなになる所を見たのはまだ始めてだが、人間も突詰めるとへと、妙になるもんだなア、これで見ても、お舟、氣の小え者は損だぜ「正直過ぎるのにも困るねえ

爲吉は一時間ばかりの後歸つて來たが、暫くするとまた出掛けて、一日に都合七八度は通つたいらう、併しこの日は、口喧しい久藏も大目に見て居てくれたけれど、翌日になつても少しも快くはならないので、請人へ引渡されて、遂にその手から瀧の川の親里へ送られて了つた

第十三

切下髪の品の好い老女が、若い女と若い下女とを連れて、楞嚴寺裏の關の家を訪れた、初音は耳の遠い婆やをあのまゝ置いたのだか、取次をさせるのは不向だから、直々に逢ひに出た

「妾は日下兼と申しまして……」「へえ、それでは口入屋のお内儀さんが申して居りました……あの入谷の方でございますか「はい、左樣で、女をお願ひに參りました「ぢやァどうか早速此方へ」と初音は直に先に立って、四疊半の間へ誘うた

序に此處で言つて置くが、初音が定めた家の間取は、この間を無論茶の稽古場にして、奥の八疊を花の稽古場、三疊を婆やの部屋、そして二階の口の三疊を弟子達の休息所、奥の六疊を自分の居間に當てたのだ

兼子は下女を玄關に待たせ、女を連れて茶室へ通つた、この兼子は某省の次官を勤めて居た人の未亡人で、家は兄息子に相續させて、この女を連れて樂隱居をして居るのだ、女の樣致は口入屋の内儀の前觸のあつた如く、

美しい事は美しい、目の張の好い派手な顔で、色も極めて黑しいが、落付がなくて不行儀に見える、少し太り肉の身を顎にもだ〳〵させて、情が燃えるかと思はれるばかりだ

兼子は慇懃に挨拶を爲て「あの者が昨日故々申して來てくれまして、先方樣はまことに御上品なお順良しい、そしてお宅にお男氣のない、丁度お望通りの方だと申しますので、それはまことに好い御宗匠だと……「いえ、宗匠などと仰しやつては痛み入ります、ほんの手解だけをお教へ申しますので「どういたしまして、そしてお流儀はと尋ねましたら、それは存じませんと申しますので、實は今朝御内々で、些と妾が御門のお掛札を拜見に出ますと、お茶は有樂流、花は池の坊とございましたから、是ならいよ〳〵お願ひ申さうと存じました、花は不勝手でございますが、お茶は妾も有樂流を少し、はい、それで一旦歸りまして、早速是を連れて參つたのでございます、蝶と申して十八になります、けれど世間見ずでございます、

から、さぞお骨が折れませうが、お茶も花も御指南を願ひたうございます

「はい、及ばずながら……そしてお稽古日は何れも月六寮で、花は一六の日、お茶は三八の日と極めて居ります、併し御遠方で、度々お越しの御迷惑な方には、毎日に一所に……「いえ、これはどの道でございます却つて運動になりますから、お勧め通りに通はせます、月に十二度、若い者には何でもございません

初音は暫く猶躊つて居たが「あの、如何でございませう、御迷惑でございませんなら、一服差上げたうございますが……まだ稽古をいたす人はないのでございますけれど、今日は道具調をいたしました序に、先刻を掛けて見たのでございますが、丁度お湯が沸つて参りましたから左様でございますか、それでは頂きたうございます、これ」と蝶子の方を見返つて「お前能くお手前を拝見してお置きなさい

初音は道具を舒に運び出して、流儀の手前見事に建てゝ二人へ侑めた、

さて蝶子は次の稽古日から、下女を連れて通ひ始めた、初音が至極親切に教へてくれるので、自分の朋輩を誘うても來るし、また他からも噂を聞付けて來て、弟子が二人殖え三人殖え、遂に十人餘にもなつた、何れも妙齢の女子で、美しいのも中にはあるが、例の人の目に止り易い艶姐、蝶子に及ぶほどの者は一人もないので

第十四

四谷の佐々彦左衛門は、久々で楞厳寺へ參詣して、僧正の居間を訪れた、諦翁老僧正和かに迎へて「おう佐々さん、今日は遅參かな、過日の木像が出來た、それ、其處にある、見て下さい」と床の間を指した

彦左衛門は早速床の前へ行つて見た、櫻の木地へ刻み上げた僧正自作の肖像が、素人にしては巧妙に出來て居るので、思はず感歎の辭を放つて「これはどうも驚きました、如何にもお美事なお作で、それに能くお似せなさ

いました、貴僧様肯似でございます、どうもお手際な事で「はゝゝゝゝ、さう褒められるはどではない、指物の方だと、少しは手心も分つて居るが、同じ刀物を扱ふのでも、彫刻は不勝手でな、拙い物が出來上つた、別にまた内佛の須彌壇を拵へ掛けて居るのだが、是は指物だから、少しは見られるやうに出來るだらう、暖が大きくつて此處では狭いから、明いた學寮を仕事場にして居ます、序に見て貰はうかと、先に立つて導いた、其處には種々の大工道具を取散かして、二尺に四尺位の鏡板を組掛けてあつた

「これはまた大きい物で、大變でございますねえ、貴僧様が斯様な物までも御自身でなさいますとは、實に御器用な事でございます「いや、坊主がこんな事に耽つて居るのは、大きに間違つた事だけれど、道樂といふものは止められないもので、古歌にも、人ごとに一つの癖はあるものを……はゝゝゝゝ

彦左衛門は此處で僧正に立分れ、妙諦の居間へ行つて「御書見中恐れ入

りますが、少しお伺ひ申したい事がございまして」と手を突いて言つた

妙諦は折節見臺の上に經文を繙いて居たので、まづその方へ恭しく一禮をしてから、じつと向直つて「これは佐々さんでございますか、今何か仰しやつたやうで……「はい、貴僧様へ斯様な事を伺ひましては濟みませんが、この邊で外に聞く人もございませんから……あのお借家に居ります女宗匠の事で、善惡とも何か噂をお聞きではございませんか

妙諦は斯る俗事の爲に道心を亂されるのを恐れてか、たゞ「少しも」との み答へた「へえ、實は女を入門させたいのでございますが、茶や花の宗匠と申しましても、胡亂な者が多ございますから、あの人は深く心得て居ります歟、また品行も知りたいと存じまして「それなら玄道に聞いてお覽なさい、あれは用事で繁く外へ出ますから、或は存じて居るかも知れません、早速此處へ呼びませうか「いえ、それでは餘り失禮で、ぢやア私が」とまた玄道の傍へ行つて、同じ問を掛けて見た

玄関は闕伽棚で花瓶へ水を注いで居た手を止めて「折角ですが、どんな様子でございますか、彼處の事は一向存じません」と同様の返答だ「へえ、感じ入つたものでございますねえ、あの家へは年頃の娘が澤山參つて居ませうから、在家で貴僧位の年輩の男なら、丁度裏合の家でもございますし、際見位は爲ませうが、流石僧正様のお弟子だけに、如何にも御堅固な事で「あ、甚兵衛が知つて居ませう、あれは毎晩近所へ遊びに出ますから、何か聞いて居るでせう

彦左衛門はまた掃除をして居る寺男に問うた「へい、好い師匠だと申す事で、お弟子も追々殖えまして、今では二十人ばかりもございます「成程、そして身の行はどうだらう、隱し男でもあるとか、悪い道楽があるとか「いえ〳〵、そんな事は少しもございません「併し弟子には男も取つて居るから知ら「取りません、弟が一人あると申しますが、お嬢さん方を預るといふので、それさへ平日は寄付けないさうでございます、何がなしに男禁制で

ございますねえ「成程、成程」と彦左衛門は至極満足の體だ

第十五

彦左衛門は楞嚴寺を出て、寺裏へぐるりと回り、關初音の家へ行つて、女入門の儀を頼んだ

初音はしつと首を傾げて「へえ、あの御遠方の四谷からでは……それとも妾の御稽古をお望み遊ばすのでございますか「いえ、矢張り本人を此方へ出します積で「あら、左様でございますが……併し車がございますから、無理にお通ひ遊ばされない事もございませんけれど「なに、寄宿を願はうと存じて居るのです「あの、妾方へは寄宿でございますつて」と初音はひそかに眉を顰めた

「關さん、打明けて申します、女は今年十六になりまして、多佳と申す者ですが、どうもまことに片意地で、親も困つて居るのです、家では兎ても

朕が出來ませんから、何所か嚴しい女先生へ預けやうと思ひましたが、流行の女學生肌にして了つて、片意地の上に生意氣になられては大變ですから、迂濶に學者方へは預けられません、それで色々考へて居ます內に、不圖貴女の事が胸に浮びましたから、實は只今楞嚴寺樣の下男に御評判を聞きまして、さういふ方なら是非願ひたいと、斯うしてお賴に參つたんです

「その思召はお嬉しうございますが、兎ても妾の方で御寄宿をおさせ申しますやうな事は……外に左樣なお連でもございますのですと、また何でございますけれど「それは道理です、たゞ一人だけ寄宿をお取り下さるのは、さぞ迷惑な事だらうとは察します、併し――斯樣な事を予しては失敬ですが、必ずそれだけのお報はいたしますから、どうかお聞入れ下されたい、尤も只今までに花も茶も少々は心得させて置きましたが、滿足な覺えやうを爲て居ません、から流儀の變るのは更に厭ひません、改めて初心のお積でお教を願ひますが、實はまだ外に望がありますので……貴女

のやうなお優しいお正しい方を手本にして、二三年もお傍に置いて十分見習はせたいので「おや〳〵、大變でございますね え、屹と好いお嬢樣になり遊ばしませう、おほゝゝゝ「いや、冗談ではありません、本氣で申して居るのですから、どうか御本氣でお聞き下さい「だつて餘り痛み入り過ぎまして、何と申し上げてお宜しいやら、御挨拶が出來ません「まアそんな事を仰しやらないで、どうか是非とも御承知を願ひます「はい、外ならん貴君の達てのお賴でございますから……でも夜は大層淋しい所でございまして、お嬢さん方では一足もお出なさる事が出來ませんでございます「その淋しいのが却つて結搆です、まさか夜遊に出るやうな女でもありませんが、よし出やうと思ひましても、出られないから安心です「左樣でございます歟、ぢやアまア……「承知下さいますか」と彦左衛門は悅んで「それでは早速明日連れて出ます

その日は直に歸つて、翌日は立派な夜具や手道具と共に、彦左衛門が直

々多佳子を送つて來た

多佳子は少しつんとした所はあるが、神々しいほどの美人だ、この日は花の稽古日で、日下蝶子も來合せて居たが――蹴押されは爲ないけれど、半は光を奪はれた、併し麗しさは違つて居る、蝶子は中肉、多佳子は痩形蝶子は溢れるほど色氣があつて、それが爲にやゝ下卑ても見えるが、多佳子はまだ初々しくて、品位も何所やら立優つて居る、蝶子が桃の咲亂れたのなら、多佳子は櫻の半開だらう、何にしても取り〳〵に趣があつて、關の弟子中での双絶双美だ

第十六

今日は茶の稽古日で、下女を從へた日下蝶子は、關の門をすつと入つて、格子戸を明けながら、早速其處に脱捨てた多〳〵の履物へ目を注けて「あら大變だ、松、まア呆驚、一い二う三い四う」と履物の數を數へて「五人も

來て居らしやるんだよ」と言ひつゝ上つた

當家へ寄宿に來てからまだ間のない佐々多佳子は、絣鹽瀬の帯紗を帯に挿んだまゝ、丁度其處へ出て來て「おや、蝶子さん、皆さんは今お茶室へお入りなすつたばかりですから、まだ〳〵お手間が取れませうよ「貴女はもう濟んで「いえ、妾がお稽古を始め掛けますと、外の方が丁度五人お揃ひでしたから――妾は何時でも出來るのですから、すぐ止して了つたんです「さう、ぢやアお二階へ入らつしやいな「參りませうか

共に共に段階子を攀ぢ、二階の三疊の休息所へ入つて、双美始めて一堂に會した、蝶子は二つ年上だけに、場合に應じた雜談を仕掛けて見ると、多佳子の應答が旨く、話が中々面白いので、その後稽古に出て來た時は他の大勢の相弟子と落合ふ事もあるのだけれど、それ等の方へは見向りも爲ないで、必ず多佳子と話すのだ、それも最初の間は四方八方話ばかりであつたが、次第に内證の事を明し合ふやうになつて、わづか半年經た

ない内に、姉妹も及ばないほどの仲好になつて了つた、それで遂に此頃では、連れて來た下女だけを歸して、この家で泊つて行く事もあるやうになつた、多佳子の方ではたゞ親しくするのみではない、浮いた蝶子を手本に爲て、衣物から髪形、歩き振まで其似るやうになつて來た、で、自然つんとした樣子が取れて、愛嬌が具はつて來たけれどもいくらか下卑ても來た

初音はそれを苦々しく思つてか、丁度その頃意見を加へて見たのだが、多佳子が頭を掉つたので「成程このお嬢さんは片意地だ、始めて思ひ當つた」とひそかに呟いて居た

さて同じく茶の稽古日の事で、蝶子が來て茶室へ行かうとすると、折柄初音が多佳子と一所に食事を爲て居たので、直に玄關へ足を返して、例の二階の休息所へ上つて行つた

初音はやがて玄關へ出て「お松どん御苦勞樣」と下女に會釋をして、段階子の下から「蝶子さん」と聲を掛けたが、返辭がないので、また重ねて

蝶子さん、もう宜しいよ」と言つたけれど、どうしたのかまた返辭がない「はてな、お寝寢でもあるまいのに」と首を捻つて、今度は一調子聲高く「蝶子さん、お稽古をいたしませうよ」と言つて見たのだが、同樣で誰も爲ない、其處で下女の方を見返つて「お松どん、お嬢さんは何處かへ行らしつて「いゝえ「ぢやァ矢張り二階へお上りなすつたんだらうかねえ、ねえお松どん「左樣でございます、お上りなさいました「妾もさう思ふのだけれど、こんなに呼んでも默つて居らつしやるのは、何故でせうねえ「へい、何故でございますか……一生懸命で何か爲すつてらつしやるんでございませうよ

初音は答を聞きさして、急に段階子を上つて行つた、かと思ふと、忙しく障子襖を明ける音が續けざまにがた〳〵響いて「おや〳〵」と初音の訝る聲が下まで聞えた

第十七

上口に腰を掛けて居た蝶子の下女のお松は、いくら待つて居ても、初音や蝶子が二階から下りて來ないので、不思議に思つたものと見えて、遂に段階子の下まで行き、「お師匠さん、お嬢さんはどうなすつて居らつしやいます」と問うて見た

初音は顏の色を眞青にして、二階の奥の六疊の間で突立つたまゝ、飜に考へて居たのだが、お松の聲を聞付けて、慌てゝ段階子の下口まで走り付けた、けれど何も言はないで、また考へ始めた、お松は下から姿を見上げて「お師匠さん、お嬢さんはどうかなすつて居らつしやるんですか

初音は返辭ごころではないといふ體で、默りで考へ續けて居る

お松はます〳〵不思議に思つた歟、ばた〳〵階子を駈上つて、初音を押除けるやうにして口の間に入り、其處をも奥の間をも見回しながら、あら、お嬢さんが居らつしやらないぢやございませんか、見えないぢやございませんか「見えないのです」と、初音はやう〳〵口を利いたが、その聲は痛く顏へて居た「な、何故でございませう、まア一體」初音はぐにやりと首を垂れて「さア、何故でせうか……餘り……餘り何な事だから、妾はもう驚いて了つて、今まで聲も出なかつたのさ「だつて變ぢやございませんか「變ですよ、妾はこの三疊に居らつしやる事だと思つて、上つて見ると、居らつしやらないのさ、だがあんなふ仲好ですから、もし多佳子さんが上つて來たら、わつと言つて脅かさうとでもお思ひなすつて、この押入へ隱れて居らつしやるんだらうと、すぐ明けて見たんだけれど、矢張りお見えなさらないから、奥の押入も明けて見ました、念の爲にあの地袋も明けたんだが……「へえ、奇體でございますねえ「奇體とも何とも言ひやうがありません「若や屋根へでも「それも見ました、まアふ前さんも來て見て下さい、そら、ね、屋根に影も見えません、この大屋根へはふ上りなさる筈もなし、また階子がなければ上られも爲ず、彼處は大きい御本堂

で仕切られて居ますから、行かうと思つたつて行かれません、だから若や屋根から下へ……「いえそんな事はございません、隨分お願見しくない方でございますが、此處から下へ飛下りるなんて、妾だつて出來ませんもの「そりや理屈はさうです、けれど居ちつしやる筈の方が居ちつしやらないといふ、理屈に合はない時だから、まア下の方も尋ねて見ませうよ「そりや左樣でございますねえ

共に下へ下りると、多佳子も驚いて力を合せ、耳の遠い婆やまでが同勢に加はつて、以前殺人騒の時、警巡査が捜索の手を盡したやうに、庭先から湯殿から便所から、門内の空地は言ふまでもなく、遂に天井の上、床の下までも探したけれど、皆暮影も形も見えない

「お松どん、お履物はありましたねえ「へい、お嬢さんのお駒下駄なら、お上口にちやんと爲てございます「だが――そんな筈は必ず無いとは思ひますけれど、萬一内々で行らつしやる所があつて、屋根からお下りなすつて、跣足のまゝで外へでも……「いゝえ、それは妾が受合ひまして、絶と左樣な事は無いと申します、此處はお淋しい所で、外で足音がいたしますと、みな此方樣へお入りなすつて、ずつと通つて行つた人を見た事がございませんから、一人でも見付けたいものだと存じて、お上口から御門の所を見詰めて居たのでございますから、木の葉が散つても目に止まらなければなりません「成程、それだと矢張り……二階でどうかなすつたものと見える「何でせう、變なお二階ぢやございませんか

第十八

下女のお松は入谷を指して足も空、主人日下の邸へ歸つて、蝶子紛失の怪事を飛報した、蝶子の母の兼子は、始め聞いた時は信とは爲なかつたが、故々知らせに歸つたほどの事だからと大急で關の家へ馳付けた。

初音は心配顔で出迎へて「お松どんからお聞きでございましたらうが、

實にもう何とも申譯のない事が出來まして兼子は忙しく喘ぎながら、「女が消えて了つたと申しますが、左樣でございますか」「はい、お消えなすつたと申しますと、何だか變に聞えますが、この二階に居らしつたのが、不圖お見えなさらないやうになつたのでございますから、矢張りまア お消えなすつたやうなもので」兼子はやゝ怒り聲で「何故また見えなくなつたのでございませう、妾には分りません」「左樣でございませうとも、同じ家に居りました妾でさへ、分りませんのでございますから「自慢ではございませんが、家の蝶に限りまして、人目を忍んでどうするといふやうな、そんな間違つた事はいたしません、はい「それは妾も存じて居りますので――是は譬でございますから、御立腹では恐れ入りますが、萬一御内分でお親しい方がございますにいたして、御途中でゝもお見えなさらないやうにおなりなすつたのなら、若や知れないやうにその方へ、と申す道理も付けられますが、この貴女、一方口の二階で、お姿が……まア搔消えたのでございます、よしお親しい方がございますにいたしても、お出なさる道がないのでございますから、何と道理の付けやうもございません、ですから蝶子さんのお身持を疑ひますのは、緣のない方角違で、只今は左樣を事を申して居ります時ではございません「それは成程御道理でございます、たゞ疑はしいのは此方樣のお二階で「左樣でございます、どうか御覽下さいませ」初音は兼子を誘つて二階へ上つた、兼子は綿密に見回りながら「これでは何處から出る處もなし、隱れる穴もございませんねえ」初音は頷いて「左樣でございませう、併しこれだと、居なくなる譯もないので「さア、それが奇體なんでございます、斯うなつて見ますと、何か妾の不行屆から起つたやうでございますが、お女中のお松どんも能く御存じの事で、妾が下に居ります内に――少しも知りません内に起つた事でございます」兼子は今は怒を收めて「はい、そりやもう斯樣に色々伺つて見ますと、貴女のお落度でない事が能く分ります、けれど一體これは何でございませう、いつれ

曰くのある事でございませうねえ「何かまア左樣な事でございませうが……どういたしたものでございませう「さア、どういたしたものでございませう、只今のお詞のやうに、蝶が途中で見えなくなつたんでございますと、また宅へ歸つて參る事もございませうし、それでなくとも、心當を尋ねると申す事も出來ますが、これではそれも出來ません、若や神隱でございませうかねえ「眞逆……とは存じますが、左樣な事でゝもございませうか「斯樣な時にはつい迷ひまして……いつそ占考を見て貰ひませうか知ら、ねえ貴女「はい、それもまた何でございますねえ「ぢやア妾は今から直に公園へ參りまして、どうあらうかまア見て貰ひませう、何れ歸りにはお寄り申しますから」と言置いて、家子は去は〳〵出て行つた

第十九

日下家子は關の家へ歸つて來たが、自分の方の事は言はないで、氣遣は

し氣に「如何でございませう、妾が行つて居ります間に、若や蝶が何處からか出て參りはいたしませんか」と初音は言譯なさゝうに打萎れて「いえ、そんなですと嬉しいのでございますが……「へえ、ぢやアまだでございますか「まだ貴女ねえ、それ切なんでございます、時にあのお占考の方は如何で「それは斯樣でございました、妾が此方のお二階のお間取から、一人で居た蝶の見えなくなりました事まで、なりつたけ詳しく申しますと、彼方も十分に念を入れて、大膽丁寧に占考つてくれましたが、矢張り神隱ださうでございます「ふゝ、矢張り左樣で「そして本人は歸る事は歸る、屹と歸つて來るに相違ないから、その段は安心をして、氣長く時節を待てと申しました「左樣でございました蛾、それはまだしも好い辻占でございます、どうか早く左樣に……「はい、占考者の申すのが本統でございましたら――氣長くと申すだけが辛うございますけれど、まア何日まで待つても歸りませんのよりはねえ、まだ

幸福でございます」と口には氣休を言つたけれど、涙が滴たらけの頬を傳はつた

初音も兼子の心中を深く察したと見えて、急に俯向いて目を屢叩いた

「實はね、お師匠さん、妾は斯う存じたので、いつそ警察へ訴へまして、お上のお手を借りてと「あの、そ、その事だけはね之日下さん、どうか此處暫くの間だけ……」「いえ、訴へやうかと申すのは、まだ行き掛に考へましたので、何も惡者があつて誘拐したのではなし、占考者の申す通りでございますと、神業でございますから、いかにお上のお手でも、これはかりは致しやうがございません「そりや左樣でございますとも、また神業かさうでないかに拘りません、妾がどうにか爲て尋ね出しませうから、淡沙汰になさる事だけは、どうか此處暫く御辯をお願ひ申して置きます、斯樣な時に勝手を申しては濟みませんが、この事が世間へぱつと知れますと、自然妾方の稼業にも差響いて參りますから「はい、それは御安心下さいま

し、兎も角も穩便に待つて見やうと存じますから……時に何時まで居りましても仕樣がございませんし、妾はもう引取ります、もし今にも宜しい便がございましたら、どうか早速お知せ下さいますやうに「それはお同まで もございませ、手掛がございましたら、直樣お知せ申しますし、お妾を見ましたら直々妾がお送り屆け申します」兼子は遂に力なく立去つた

後に初音は多佳子を呼んで「貴女もどうか氣を付けて下さいましよ、こんな事は二度とある譯はございませんが、もし有つたら大變ですから、ねえ、妾はあの日下さんの母御さんがお氣の毒で、立つても居ても居られません、それにこんな事がまた有つて御覽なさい、貴女のお父さんへも世間へも、合はす顏がありません、ほんとに妾はこんな辛い思を爲た事は、生れてまだ始めです、何だか壽命が縮まるやうです「お師匠さん、能くお察しゲして居ります「それなら氣を付けて下さいよ「はい「序だからゲしますが、貴女はどうかお素直になすつて、なるべく妾に世話をお焼かせあさ

らないやうにねえ」多佳子は默つて頷いた

第二十

或日入谷の日下兼子が、下女のお松を從へて、彼の口入屋の内儀を訪うた、内儀はつと驚きながら出迎へて「あら、日下樣の御隱居樣ぢやございませんか、何だつてまた妾風情の家へ御直々に……」「少し聞きたい事があつてね、あのう、お前さんは、家の女の今度の事をお聞きなさらんか「いゝえ」と内儀は頭を掉つた「女が關さんへ參つたのは、始めお前さんが知らせて下すつたからで、緣がないでもないのだから、また手掛もあらうかと思つてね、實はそれで來たんですが、まだお聞でないのなら」と蝶子紛失の一件を詳しく話した「おや〳〵、そりやまア大變、まアとんだ事で……」併し何日の事でございます「今から十日前の事で、妾は神隱だらうと思ふし、占考者もさう言ひますので、その積で歸つて來るのを待つて居

ますが、今に何の昔沙汰もないのです、家の伜は神隱なぞといふ理屈はない、警察へ捜索願を出さうと言ひますけれど、お師匠さんが、その邪は待つてくれろとお頼みなさるから、まだ表沙汰には爲ないのです、それで妾は毎日のやうに關さんへ樣子を聞きに行くので、今も行つて來たんだが、矢張り何の便もないさうでね「へえー、それはどうも……また彼所は始終變な事ばかり有るお家でございますねえ「え」と兼子は聞咎めて「何かまだ外にも「へい、斯うして見ますと、あのお家は極つて人間が無くなるんでございますよ「おや、女の外にも人の居なくなつた事が「ございます、この前は貴女、死骸が無くなつたんでございます」と内儀は殺人事件をざつと話して」その死骸を見たとやす魚屋の小僧は、妾の方から入れた奉公人でございますが、自分の仕した事を嘘にされて了つたもんですから、可哀さうに、殘念がつて末がぽつとして了つて、何だか健忘のやうな病氣になりましてね、到頭瀧の川の親元へ引取られて了ひましたの「まアどうも

それは、成程變な家だねえ、重ね重ねそんな事があつたやうでは、こりや妾もうつかり爲ては居られない、兎も角大家さんの方へでも……あれは楞嚴寺樣のお家ですねえ「へい、左樣でございますけれど、楞嚴寺樣の檀頭の佐々さんと申すのが差配をなすつて、お寺では少しもお構ひなさらないさうです、佐々さんは四谷の荒木町だと申しますが、關さんで彼所をお借りなさる時も、態々四谷まで行らしつたんださうでございます「それは大層遠方だが、妾は行つて來ませうよ「左樣ですねえ、またお手掛になる事があるかも知れませんから、さうなさるのもお宜しうございませう、併し御隱居樣、若や祟ぢやございますまい歟、彼所はお寺で墓場の上へお立てなすつた家かも知れません、けれどお德のある方がお住居でしたから、今までは何事もなかつたんで、今度在家が住んだもんですから、始めて家へ祟つて來たんぢやございますまいか「それなら主人のお師匠さんへ祟る筈さ、何か外に譯あるのだらうが……どうも、妾には分らない」と兼子はじつ

と首を垂れた「へえ、祟でもないといたしますと、矢張り妾にも分りません」と內儀も同じく首を垂れた

「何だらう「何でせう「怪しい家だねえ「怪しい家でございますねえ

怪しい〳〵と言はれて居る初音の家では、またもや一怪事が持上つた、

兩美の一の桃の花は、何處へともなく散つて行つたが、後に殘つた櫻の花も、今は萎れ氣味なので

第二十一

多佳子は不圖病氣に罹つて、寢るでもなく起きるでもなく、只ぶら〳〵して居るのだが、數日の間に目立つほど痩せて、さしもの美貌も衰へた、初音はこの多佳子の病氣が頗る心配の樣子だ、併しそれで居て、早速醫者に診せるでもなく、自分で藥を買つて來ては服ませて居るので

折節佐々彥左衛門が、また楞嚴寺へ參詣した序だと言つて訪れた、初音

は忽ち顔を皺めたが、何心ない體で茶室へ通した、そして當座の挨拶が濟んで了つても、なは多佳子の病氣の事は言はないで居る

「女が日々〳〵御厄介になりまして、さぞ御面倒な事で」と言ひながら、彦左衛門は些と後を見返つた、多佳子が直に來さうなものだと思つてだらう「どういたしまして」「あの、多佳は何方へか參つて居りますか」と遂に口へ出して問うた「いえ、左樣では……」……些とこの四五日ね「へえ、加減でも惡いとやすやうな事ではない、お惡いとやすはどではございませんけれど、少し何でございます……全く些としたお風邪でございませう、寢たり起きたり爲すつて居らつしやいますので」と初音はつい手輕に言つた「左樣ですか、少しも存じませんでした、たゞさへ御厄介でせうのに、そんな風ではなは〳〵お手が掛りませう、何處に居ります「はい、花のお休の日は、其處の稽古場に居らつしやいますが、御心配遊ばすほどの事ではございません」と初音はまた手輕に言つた

けれど親の身になつて見ると、たゞ聞いたゞけでは安心が出來ないと見えて、彦左衛門は奥と取合の襖をがらりと明けて見た、多佳子は亂髪で、其處に伸べた寢床の上に坐つたまゝ、じつと俯向いて居た

「これ、お前はどんなに惡い」多佳子は澁々といふ風に、些と顔を上げて「何處がどうとやすはどではございません、たゞ心持が變なんで……當分の事でございませうよ」と是も同じく手輕に言つた「いや、斯う見た所では、どうも當分の病氣ではないやうだ、お師匠さんも輕いやうに仰しやつて下さるし、お前もそんなに言ふけれど、顔の色が大層惡い、その上餘程痩せたやうだ、こりやア今の内に手當を爲ないぢやア……」「いえ、自分ではそんなに重くは思ひません「だつて素人で分るものか、さう何でもないやうに思つて居るんぢや、どうせ醫者にも掛つては居ないのだらう、暫くお暇を願つて、四谷へ歸つて、醫者にも掛つて、ゆつくり養生をするが好い「なに、そんなに大層にするほどの……「それ、また、また片意

地を言ふ

多佳子はぷりつとして、急に身を背向けた、初音も取止めたい樣子であつたが、是では兎ても思つたと見えて、何も言はないで了つた、彦左衛門は改めて、初音へ多佳子の暇を乞ひ、遂に四谷の家へ連れて歸つた

多佳子の母、の秋子といふのも、寂耳に水の驚で「これ、多佳子、お前はまアどうしたもんです、そんなに惡いのなら、何故手紙をお出しでない、知つたらすぐ迎に行くのに「だつてそんなに大騒して、故々知らせるほどの病氣ぢやアないんですもの　彦左衛門「えゝ、まだあんな事を言つて居る、秋子、早速醫者を呼びに遣つて下さい、岡本の方が好いだらう、あれは婦人科だから「お父樣、妾はお醫者さんには及びません「これ、そんな馬鹿を言つては可ない、病氣で居て、醫者に掛らないで居られるものか「いゝえ、直好くなるんでございますから「失礼りあれだ、どうも何日までも片意地で困る、秋子、構はないで早く醫者を

第二十二

多佳子は病氣の眞相を見破られるのが恐ろしいと見えて、すでに醫家へ使の行つた後までも、まだそれには及ばないと言つて居たが、はや醫師が出て來たので、もう言つても無益だと思つた歟、今は醫師の診察するまゝに任せて居る、彦左衛門秋子の夫婦は、傍で見て居るのだが、病氣を疑ふ樣子は更にない、言出した事は枉げない多佳子の氣象を知つて居るから、たゞ片意地で醫師を嫌ふのだとばかり思つて居るらしい

醫師は診察を了つた、けれど其處では何も明さないで「御主人、些と御別席を」と言つた、彦左衛門は不思議の面持で、秋子と顔を見合せた、そして頻に考へながら、遂に醫師を離れた座敷へ導いて行つた

醫師はまだ坐らない間に「御姙娠でございますよ」と小い聲で、有るまじき事のやうに言つた「えッ、姙娠「私も意外に思ひましたが、今は三月

位でせう、あれは惡阻でお惡いのです「岡本さん、冗談言つちやア可ませんよ「いえ、決して、如何にお心安ういたす中でも、業務の上に冗談は申しません「だつて貴君、男出入のない、嚴重な女宗匠の家へ預けて置いたんですもの、そんな、はゝゝ、そんな事があつて堪るもんですか「それは私は存じませんが、事實御姙娠だから仕樣がありません、有體に申すのです「ぢやアいよ〳〵姙娠ですか「はい、この岡本が斷言します、必ず御姙娠です、決して誤診はありません「へえ…、貴君が其處まで堅く仰しやるんでは……併し不思議です、どう思つても不思議です「さア、私も據さんのお嫁入なすつた事はまだ聞かないのにと、實は不思議に思ひましたから、斯うして御別席の上で、窃に申上げるのです「成程、左樣でしたか、いや、どうも飛んだ事を仕出されて了ひました」と當惑の首を垂れた「御心配でせう、深くお察し申します、時に藥を差上げませうから、後刻お使を」と言置いて、醫師はゝや立掛けた「あ、岡本さん、どうか他へは御内分で…

「承知しました、醫者は秘密を守り付けて居りますから、御懸念には及びません」と遂に歸つた

するとその後へ秋子が駈込んで來て、最初にわつと泣伏して了つた

「ひ、ぢやアお前は外で聞いて居たのか「別席とは變だと思ひまして……

「さうか、多佳子は呆れ返つた奴ぢやないか「ほんとにどうも呆れ返へて……「病氣は極輕いなぞと言つて、醫者に見せるのを嫌つて居たのは、全くあれだつたからさ「左樣でしたねえ、また姙娠とは餘り思ひ掛けなくつて、何だか嘘のやうに思ひますよ「だつて婦人科專門の醫者がさう言つたんだもの、斯うして見ると、あの初音も知つて居るのだ、自分の預かつた弟子にこんな過があつたら、内々親元へ通じてくれなくつちやならないのに、今日もお前、多佳子と同じ事を言つて、いや輕いの風邪だのと、己を瞞着さうと爲て居たんだ、憎い女だ、はゝア、こりやア何だよ、初音はたい知つて居るだけではない、共謀になつて居るのだらう、でなきやア醫

す譯がないもの「さうでせうよ、そりや屹とさうでせうよ、多佳子はまだ子供ぢやありませんか、あれが自分で情夫なんぞを拵へるもんですか、屹と師匠が勤めて持たせたんでせうよ「さうだらう、憎い奴だ、今から行つて談じ付けて遣らう、併しまづ本人を叱り付けて、相手の男を言はせなくつちや、さア、お前も來な」て夫婦共に多佳子の傍へ押寄せた

第二十三

彦左衛門は跳む息を抑へながら、多佳子を睨んで「これ、お前は姐娘して居るのださうだ」と言つて、ぢつと樣子を窺つた

多佳子は更にびくとも爲ない、打萎れてたゝ俯向いて居るばかりで「いくら剛情なお前だつて、これぱかりはさうでないとは言はれまい、あの岡本が確にさう言つて歸つたんだから、秋子は傍より「またお前はとんだ事をお爲だつたぢやありませんか、斯う見た所でもまだ小娘だが、何故

そんな大膽な事を爲ておくれだつた、これが家へ出入の者の娘かなんぞなら、また何だけれど、四谷で佐々と言つたら、名の聞えた家ぢやありませんか、其處のお孃樣とも言はれる者が、まだその年で居て、内々男を拵へるとはどうした事です、自分は生涯疵物になつて了つて、まだその上に、親々の顔へ泥を塗つたんだよお前は、併し有つて過ぎた事だから——中々有つて過ぎたなんて言つて居られない事柄だけれど、まア有つて過ぎた事だから、姐娘した事は仕樣がないとして、自分でそれと氣付いた時、何故そつと妾だけへでも知らせないの、知らせた所で、妾だつて、お腹の塊を取つて除けるといふやうな事は出來ない、けれどまた人の目に掛らないやうに、始末をして了ふだけの分別はあります、お前は今まで隱してお居でだつたけれど、それが了ひまで隱し切れますか、追々お腹が大きくなつたら、厭でも世間の人に知れて……「まア秋子、そんな事は後にして、早く相手を聞かなくつちや、これ、多佳子ッ」と彦左衛門は殊に烈しく呼掛けた、

多佳子は矢張りびくとも爲ないで俯向いて居る

「お前が不義を働いた相手は誰だ、え、これ、默つて居ては分らない、多佳子、これ、おい」多佳子は唇さへも動かさない

彦左衛門は方針を變へて言はせる積かして、暫く考へて「關の家へ男の者が出入をするか」多佳子も是は答へ易かつたらしい、早速口を開いた、併したい一語「いゝえ」とばかりだ

「あの師匠に弟があるさうだから、それが始終遊びに連つて來るのだらう」

「そんな事はございません、妾は聞いて居ますけれど、まだ見た事もない位でございます「はてな、誰も男は來ない、弟も來ないとすると……ぢやァお前は外へ遊びに出るか「いえ、妾が彼處のお家へ參りましてから、まだ一度も遊びに出た事はございません「そ、そ、そんな事があるものか「だつて出ないんですもの、お師匠さんは外出がお嫌でございますから、一所に出やうと思つたつて、出る機がございませんし、妾一人では出して

下さいませんから……過日蝶子さんと觀音樣へお參をしやうと思ひましたけれど、行つては可ないと仰しやつた位ですもの、それにお家にお湯殿がありますから、お湯へだつて行きは爲ません「ぢやァ外へは遊びに出ないし、湯へも行かないとすると、家へ男が出て來るんだ、が、まァそんな事はどうでも好い、相手は誰だ相手は」多佳子は又俯向いて、元の沈默に返つて了つた

「何故默つて居る、言はないか、相手がなくつて姦振する道理がない、さア、言はないか」多佳子は更に應じないから、彦左衛門は遂に激して「どう、どうしたつて言はせる、痛い目させてもッ」多佳子は泣くと見えて、顏を袖で抑へながら涙聲で「惡い事をいたしました、妾も後悔して居るのでございます、けれど相手ばかりは申されません、その事ばかりは經令死んでも……「えゝ、親を馬鹿にしてッ「いくら叱られましても、常から片意地だと言はれて居ります妾が、言はないと決心したんでございますか

ら……」彦左衛門夫婦は呆れて顔を見合せた

第二十四

生來片意地な多佳子が、自ら片意地を題に出して、死んでも相手は明さないと言ふのだから、いくら責めても、たゞ口で責めた位では詞費だ、厭でも嚴しく折檻を加へなければ、男の名を言はせる見込はない、けれど姙娠中だから――加之も弱々しい小娘の事だから、そんな手荒な事を爲たら、必ず大切の身體に障るだらう、これはいつそ初音に實を吐かせる方が近道だ、何れ談じ付けに行くのだからと、夫婦の評議が一決した

で、彦左衛門はまた遙々車を走らせ、黄昏頃に再び關の家へ行つて、初音に逢ふとまづ厭味で「お師匠さん、大層お眼がお宜しいので、多佳はお蔭で姙娠しました」とずつきり言つた、初音はぱつと驚いた體で「ふやふや、それは何かお間違では……そんな筈はございませんが「はゝゝ、能

くそんな白々しい事を仰しやる、大事の女を途方もないお師匠さんへお預けゞして、今更後悔して居ます「ふや、變な事を仰しやいます、何も妾の方からお願みゞしたんではなし、あの通りお謝絶りゞして居りましたのに、貴君が無理にお押付けなすつたんぢやございませんぬ、これだとゞして、何も粗末にお扱ひゞした譯ではありませんが、さう仰しやると、妾の方でもゞさずには居られません「ひゝ、それは如何にもさうでした、お寺で貴女の評判を聞いて見ると、お僧達は存じはなかつたが、下男が能く知つて居て――今考へると何も能くではありませんでしたけれど、大層褒立てたもんだから、うつかり信じて了つて、無理にお願みゞしたので、その義は私の不念でした、が、まア何にしても、多佳をあんな身體にさせるとは、實に怪しからん事です「大層ぢ立腹でございますけれど、決してぢ姙娠なさるやうな譯はないのでございますが「いや、お途惚けなすつたつて無効ですよ、多佳が身重になつて居るといふ事は、貴女は以前から能くぢ承知

なんだ「あら、何でまア妾が……」「可ません、貴女は多佳の病氣を輕い輕いと言つて、隱すやうに爲て居たぢやありませんか「それはたゝ風邪だと思つて居りましたし、またお髮の亂れた樣子を見せまして、親御樣にも心配をさせましてはと存じてゝございます「まアその事はそれでも宜しい、併し多佳を姙娠させた相手は誰です「そ、そんな事を貴君、多佳子さんは外へお出なすつた事はなし、家へ男は參りませず、相手のある譯はございません、ですからまだ妾は、ほ姙娠なさる筈はないと存じて居りますので

彥左衛門はじつと首を捻つたが、突然に「貴女の弟さんは何處に居らつしやいます」と問掛けた、深く彼を疑ぐつて居るらしい「弟は藏前の千束屋さんとやすお家に拳公をして居りますが、妾方へは少しも參りません」どうですか、併しそれが本統なら、外に來る男があるので、何れにしても貴女が取持たんだ

初音は憤とした體で「これは變な事を仰しやいます、まア考へて見て下さいまし、餘處樣のお娘御に――加之もお預りした御大切のお孃樣に、男なんぞを取持ちまして、妾に何の益がございます、親御樣へ義理を缺いてまで、何を取得にお孃樣を疵物にいたしませう「だつて疵物になつてるんですもの」初音はます〳〵詞鋭く「あら、佐々さん、一度ならず二度ならず、貴君とも思はれない御無體を仰しやるぢやございませんぬ、まづ假りに多佳子さんが疵物になつてらつしやるに致して、疵物にふなりなさへすれば、必ず妾が取持つたんでございますぬ、何か確な證據でもございますぬ、多佳子さんが左樣な事を仰しやいましたぬ」と疊み掛けて責立てた、これには彥左衛門は一句もなかつた

第二十五

彥左衛門は夜を更して四谷へ歸つた、秋子は非常に待兼ねて居た樣子で

「大層お遅うございましたが、知れまして」と早速問うた「いや、知れない、それで今まで駈擦り回つて居たんだが、どうしても知れない「へえ、師匠がヤしてくれませんか「あの初音の奴、必ず知つて居るに相違ないと思ふんだが、一々理屈詰にして、どうあつても相手を言はない、だが己は何でも初音の弟だと思つたから、初音の手前も遠慮しないで、一旦關から出掛けたのを立戻つて、弟が拳公を爲て居るといふ家の番地から、源次郎といふ名前まで直々に聞糺して、すぐ藏前の主人の家の前まで行くと、丁度其處の小僧が外へ出たから、そつと小陰へ呼んで、金を遣つて聞いて見た、その小僧の言ふ所では、源次郎といふ男は大層身持の好い男で、五六人もある拳公人の内の褒物で、近々に店の暖簾を分けて貰ふんださうさ、それに姉の初音とは氣が合はないとかで、引越の日には無理に連れて行かれたさうだが、その後姉の家へ出掛けた事は一度もないと言つた「おや、ぢやァその男でもないんですかねえ「さァ、身持が好いと言ふのばかりは、

あの時お寺の下男に擦がれて、もうすつかり懲りて了つて居るから、迂闊に信用は爲ないけれど、併し近々に暖簾を分けて貰ふんだと言ふ所から見ると、全く不身持でもあるまいし、また初音の家へ立寄らないと言ふ方も多佳子や初音と口が合ふのだから、是もどうやら眞實らしい「ぢやァ相手は一體何處の者でせうねえ「それさ、肝心目當にして居た弟の方が外れたから、もう見込がなくなつて了つた、けれどさう言つて打遣つとく事は出來ないから、また關の家の傍まで引返して來た、併しあの邊は墓場ばかりで、外に家のない所だから、近所で聞いて見るといふ事も出來ないので、出入の商人の家で聞かうと思つた、それには酒屋なんぞが好いんだけれど、關は女世帶の家だから、酒屋は出入を爲ないかも知れないと思つて居ると、魚久といふ魚屋が目に止つたから、店を了ひ掛けて居た内儀さんに聞いて見たが、丁度好かつた、それが關へ行く魚屋で、加之にその内儀さんばかりが行くんださうさ、初音は大層口に贅ると見えて、あの家不相應に料理

を取る樣子だ、まアそんな事はどうでも好いが、内儀さんは、男は決して行かないと言つて居る、妾の方でも今は小僧が居ませんから、毎日妾が二三度づゝは是非參りますが、まだ男の方を見掛けた事もございませんと言ふのさ「へえ、奇體ぢやありませんかねえ、昔は狸が新造を見込んで、好い男に化けて通つたといふ話もありますが、今日の御時節に異逆ねえ、彼處の墓原には狸も棲んで居ませうけれど「ふゝ、詰らない事を言出したもんだ、相手は人間に極つて居るさ、何しろそんな風で手掛はなし、夜も更けて來るしするから、今夜は空しく歸つて來たが、是非急に手を盛して、捜り出さないぢやア置かない積さ、實はね、今歸りに考へたんだが、初音は男ぢやアないだらうかと思ふのさ、外に男が出入を爲ないとして見ると、さうでもなけりやア理屈が合はないから、併しそれはそれとして、多佳子をあのまゝ家には置けない、雇人や近所の手前も面目ないから、外の病氣で出産をさせるといふ事にして、早速別莊の方へ遣つて了つて、彼方で

子を産ませる事にでも爲なくつちや「さうですとも、もうそれに限ります、氣取られてからは、口止を爲ても無効ですから

翌日夫婦連で、多佳子を王子の別莊へ送り付けると、裏門の方に土地の子供が集まつて居て、口喧しく「また馬鹿が來やアがつたい、馬鹿やーい」と囃し立てゝ居た

第二十六

彦左衛門秋子の夫婦は、別莊中で容易に人の立入らない一間を、多佳子の病室に見立てゝ、床を展べ、多佳子を寢させなどして居る内も、なほ表門の外の方で、子供が群を合せて「馬鹿やーい」と囃し續けて居るのだ

彦左衛門は顔を皺めながら「何だらう、厭々しい」と故々奥座敷の椽側まで行つて、滿天星の垣根越に見透かして見たが、見えなかつた「何でせう」と秋子もまた付いて來て「田舍の子はこれで困りますのねえ、何とか

言ふと酔を揃へて離すんですもの、斯う騒がしくされた日にやァ、病人が逆上せて了つて「なに、始終こんなでもあるまいよ」とまた見撫かさうとして、不圖別荘守の影を見止めた

別荘守の老爺は、不時に主人の御來臨といふので、酷く面喰つて了つて、何より先に把稿を持つて奥庭へ走り付け、今專ら御影石の大手水鉢の腐水を抄出して居るので

「おい、爺や、外で喧しく言つてるのは何だ「へい、あれはその、馬鹿だ、馬鹿だつて了して居ますが、馬鹿ぢやァねえんで、氣が少し變になつてるんでがす、狂人でもねえんでがすが「はゝァ」と言ひながら、彦左衛門は庭下駄を突掛けて、垣根際まで行つて外を覗き、また元へ歸つて來て「大方あれがさうだらうが、まだ若い男ぢやァないか「へい、まだ十八だてへんでがすが、可哀さうに、あんな病氣になつ了つて、あれは旦那樣」と爺やは眞向に向直つて、濕れた手をそのまゝに指し「この先の瀬の川の者で、

爲吉といつて、小百姓の倅でがすが、鍬の柄を握るのが厭な所から、江戸の浅草の魚屋へ拳公に行つてたんでがす、所がお前樣、楞嚴寺てへ名高えお寺の裏手へ貸家が出來て……「ひゝ、あれは己が差配を頼まれて居る家だ「おうや、左樣でがすかい」と呆れ顔を爲た「それで、あの家がどうしたんだ

「ぢやァ言つちや悪いか知ら」と口の中で言つて、爺やは頗る脚蹶の體だ「おい、俄に何を考へ出したんだ「えゝ、言つ了ひませうよ、その今言つた貸家を借りた人から誂があつたから、あの爲吉が持つてくてへと、入口の所に女が殺されてたんだ「えッ、あの家の入口の所に「へい、それで爲吉が打魂消て、交番へ屆けに行つて、今度巡査と一所に行つて見ると、その死骸を隠し了つたもんと見えて、もう見えなくなつて了つてたんでがす

「はてね「それで爲吉が嘘を言つた事になつ了つて、目の玉の飛出るほど叱られたもんだから、たゝ口惜しい〳〵で以て、到頭あんなに……」彦

左衛門は手を組んで考へ始めた

この時臺所の方で「鈴やさん」と呼ぶ聲が爲たので、鈴やは慌てゝ駈けて行つた

後に彦左衛門は秋子へ小聲で「分つた、初音は矢張り男だせ、その殺されて居たといふのは、情婦か何かで、夫婦喧嘩でも遣つた機に手が回つたんだらう、併しその事は何とも分らないが、女が殺されて居たとすると、いよ〳〵初音が男らしく思はれる、昨夜お前に話して居た通りだよ「妾はまだ逢つた事はありませんが……」「なに、逢つては分らない、如何にも妾が優しくつて、決して男とは見えないけれど……」「ぢやア多佳子に問落して見たらどうでせう「さうだ〳〵」と彦左衛門は勢好く立上り、病室へ駈付けて「漸く考へたんだが、お師匠さんは男なんだね」と輕く言つて、顏色をじつと見た「あら、何をお考へなすつてそんな事を「いや、男らしい、屹とさうだらう「そんな馬鹿らしい事がございますもんか「だつてさうら

しい、男だらう、實は今そんな噂を聞いたんだ、え、さうだらう男だらう多佳子は例の默つて了つて取合はないから「えゝ、また持病が始まつた

第二十七

彦左衛門は腹を立てゝ、足音高く病室から出掛けると、秋子が氣遣つて覗いて居たので、手招して奥座敷へ誘ひ「あんな横着な奴はないよ」と憎憎しさうに言つた、秋子も顏を斂めて「言ひませんねえ「言はない、何日だつて如彼だ、何でもない事だと、譯なく返答をする癖に爲て、さア肝心だと言ふ事になると、すぐ默つて了つて、どうしても言はない、自分が斯うと思つた事は枉げない奴で、今始まつた事ぢやアないが、あれほど片意地なのもまた珍しい「ほんとにねえ、困つたもんで「だがね、あの初音はどうしても男だ、初音といふ名からして——いや、固り女の名だけれど、男が付けても好い名で、現に付けて居る人もあるんだ、中には音の字を子

といふ字にして、矢張り初子と讀まして居る人さへあるんだ、何處かの新聞に出て居たが、その人が獨演說をするといふんで、廣告を爲た所が、そら、文字が初子と讀めるんだから、やア女の演說だと言ふので、鼻の下の長い連中が通券を買つて詰掛けると、大きな髮男が演壇へ顯れたので、聽衆が立腹して、詐僞取財だと言出して、大騷を遣つた事があるさうだ、話は少し横へ外れたが、そんな文字を書く男さへあるんだから、初音といふ名は女には限らない「そりやさうです、だから師匠も男かも知れません、女ばかりだと思つて居た家で、多佳子が姙娠をしたんですから、男の師匠が女になつて居るとよりは思はれませんねえ「さうさ、たゝ名前だけで疑ふのは此方が無理だが、今お前が言つたやうな理屈もあり、また外に心に當る事もあるんだから、一つ小氣味好く化の皮を引剝いで遣りたいもんだが、それにはあの爲吉とかゝ證人になつてくれると、大層都合が好いんだ、今考へると、殺されて居たといふのは間違かも知れない、大方隱し女が初

音と喧嘩でも爲て、打倒されていも居たんだらう、何にしてもその事から調べて掛つたら、初音はぐつとも言へなくなるんだから、爲吉を證據人に欲しいもんだが、何分あんな風になつて居ちやア……「病院へでも入れたら直るでせうが、急の間には合ひますまいねえ「なに、見た所では、酷く氣が狂れて居るといふのでもないやうだ、長く掛らないで直るかも知れない、よし急に直らないで、此方の役に立たないでも、人一人助けるのだから、兎も角病院へ入れて遣らうよ、親は小百姓ださうで、自分では入れて遣りたくつても遣れないんだらうから、さう爲て遣つたら悦ぶだらう、併しまづ本人に逢つて見やう」と瑞やを呼んで旨を授けた

爲吉はやがて瑞やに袖を引かれて、俯向きながら庭先へ出て來たが、左衛門夫婦を見やうとも爲ないで「變だ、どうも變だ」と首を梓りつゝ言續けて居る、魚久を出された時と同じ調子だ

彦左衛門は椽側へ出て「お前は楞嚴寺裏の家で死骸を見たさうだが、本

統か」と穏かに問うた、すると爲吉は息吹返したやうに「本統だとも」と元氣好く頭を上げて「殺されてたんだもの、己等がこの目で見たんだもの

「それを皆が嘘だと言ふんだね「さう、だから變だ、彼家の入口でお前、こんな風に」とまた例の手眞似で、両手を伸して反返りつゝ話すのだ「成程、そんな病氣に罹つても、今にまだまう詳しく覺えてるんぢやア、居た事は居たらしい、殺されて居たか倒れて居たかは二段にして「だつて殺されてたんだもの、己等のこの目で見たんだもの

彦左衛門は遂に爲吉の親を招き、大略内情を打明けて、入院の事を話すと、果して非常に悦んだので、直その日よりの費用を與へて、親の手から田端の腦病院へ入れさせた

第二十八

彦左衛門は別荘へ秋子を殘して、自分だけ四谷の家へ歸つて來ると、玄

關に面識のない老女が來て居て、御歸宅をお待ヤして居たといふので、怪しんで來意を問ふと、關の家に關つた事柄だから、それでは此方へと客間へ通して、改めて問直した

待つて居たのは日下兼子で、樣子紛失の一件を微細に話し、なほ續けて

「倅は捜索願を出せとヤします、お師匠さんは待つてくれろと仰しやいますし、中に挿まつた妾は、途方に暮れて居るのでございます、最初は隠だらうとヤして居りましたが、またあの家が業をするのかとも存じますので、兎も角一度御差配樣のお耳へお入れヤしてと、それで故々參りましたやうな事で、「へえ——、奇體な事もあるもんですねえ、畫日中に、加之も二階で人が消えて了ふなぞとは「實に奇體で、誰人にお話しヤしましても、大抵の方はお信じなさいません「さうでせうとも、またあの關の家はどういふ譯だか、重ね〳〵奇體な事が……「ぢやア死骸の紛失いたした事はお聞及びで「あ、成程、あれもありましたねえ、今私が重ね〳〵とヤ

したのは、外の事ですけれど「おや、まだ外にも何か

彦左衛門は言ふのを耻ぢて歟、詞を外して「併しその……お嬢さんの方の事は何日でした「左様でございます、もう半月餘になります「はてね、私の女は病氣で、昨日連れて歸りましたが、その時はまだ闕に居ましたから、見て知つて居るに相違ありません、有闕れた事なら格別、そんな奇體な事を知つて居るのなら、歸つてから話しさうなもんですが、何も言ひません、また私は昨日闕へ二度も行きましたが、矢張り初音も言ひませんでした、こりやア何でせう、互に皆が申し合せて、隱して居るのと見えます、どうも怪しからん奴ばかりで……日下さん、是は貴女だけへ申しますが、女の病氣と申すのは、實は姙娠したのです「おや、あの闕さんへ行つてらしつたお孃様が、「左様です、あの男氣のない闕の家で姙娠しました、是が不思議の一つ、また死骸を見たと申す者に、今日圖らず別莊で逢ひましたが、あれも不思議、その上貴女のお孃さんの事もあるとすると、どうでせ

う、一軒の家で三つも不思議な事が起つたのです「どうも〳〵餘程變な家でございますねえ、ある者が申しましたが、彼處は墓場の上へでもお建てなすつた家で、それで祟るのだらうかと……「はア、外ではそんな說もございます歟、私はまた初音を男だらうかと思ふのです「あら、あのお師匠さんを「左様です、死骸を隱した事も、女の姙娠した事も、みな彼奴が男ゆゑだと考へるのです「へえ、あの方が男でございませうかねえ「併し貴女のお孃さんの方は、畫日中に二階でお消えなすつたんだと申すと、是は初音の男女には拘りません、何か別の事でせうねえ「それは左様でございます、お師匠さんの御存じなさらない事でございます、妾へ濟まないと仰しやつて、大層御心配をして下すつた御様子でゝも、御存じのない事は分りますし、また女に付いて參つて居りました宅の下女が、その時の事を能く知つて居りまして、矢張りお師匠さんの御存じない事だと申して居ります「成程「時に如何いたしたものでございませう、妾の女の方の事でご

ざいますが、倅が喧しくいひますから、矢張り捜索願を出します事に……

「それは少しお待ち下さいまし、明日は是非とも初昔の化の皮を引剝いで遣る積りです、そしていよ〳〵男でしたら、何の疑も一時に霽れるのです、貴女の方の事ばかりは、人間業ではないやうですが、矢張り何か關聯して居るかも知れませんから、どうか明日までお待ち下さいまし、結果はこの方より申上げます

第二十九

彦左衛門は例の婦人科醫の家へ行つて「岡本さん、今日は御無理をお願ひ申しに參りました、多佳は王子の別莊で窃に分娩させます積で、昨日彼方へ連れて行きましたが、あの邊のお醫者樣に診せるのは厭ですから、矢張り貴君のお藥を頂いて、宅から運ばせる積です、自然また多佳の身體に異狀が起りましたら、遠方ながら御出張を願はねばなりませんが、今日は

少し方角違へ、矢張り御出張を願ひたいのです「何か御親類に御病人でも「いえ、多佳を預けて置きました家へ、御靈定に行つて頂きたいのです、先方は女の宗匠ですが、私は男だらうと思ふのです、併しそれを見極めるのが困難で……町の湯へ行くのですと、捜る道もありますが、家に湯殿があるのですから、そつと誰かに聞いて見るといふ事も出來ません、又肌を脱がすやうな手荒な事を遣つて、萬々が一男でなかつた日には、後で申譯がありませんから、これは咽佛を見るに限ると思ひましたけれど、現に男の内に、咽の喉の顯れて居ない者もある位ですし、髭は固より少ない質の顔ですから――その上怠らず剃つて居ませうから、兎てもそんな事を當に爲て居ては分りません、何しろ惣體が女らしいので、女に化けて居るのでせうから、素人の鑑定では無益だと思つて、貴君へ御苦勞を願ひに參たのです、尤もこんな事は御職掌に背けるかも知れません、若それなら、御職掌の上でゝはなく、お心安いといふ所でお聞入下されたいのです、私も

御同行いたしますから「はゝゝゝ、餘儀ないお願ですから……」「ではお聞入下さいますか、これは有難い、私は先方へ行す事はいくらもありますが、今日は故と苦情は言ひませんで、好い加減な話で繋いで居ますから、十分お見分が付きましたら、もうお暇をしやうかと仰しやつて下さい、すると一旦御一所に外へ出て、御鑑定を承つてから、私一人で改めて怒鳴り込みます

彦左衛門はやがて醫師と車を列ねて、淺草の關の家へ赴き「初音さん、今日はこの方と一處に榜嚴寺様へ參りましたので、序に任せてまた來ました、例の相手の男の事ですが、多佳を責めては見ますけれど、どうしても言ひません、から、貴女剛情を仰しやらないで、是非ともどうかお明し下さい」と搗塞ばかりの事を言つた

醫師は彦左衛門の隣へ坐つて、それとはなく眼を放つた

初音は痛く迷惑顔で「あら、貴君はまだ左様な事を仰しやいます、妾が

存じて居ります位なら、少しも隠しはいたしませんけれど、本統に存じないのでございますから……」

彦左衛門はこの返答に心を止めないで、腹の中で「畜生、今日は本職の人を連れて來て居るんだから、どんなに己を欺かうと思つたつて、無益な事さ、見ろ、今に……」

醫師はやはり鑑定が付いたと見えて「佐々さん、もうお暇ヤさうぢやありませんか「え、もうですか、ぢやア參りませう、初音さん、また〳〵ヤしたい事があるんですが、今はお連がありますから、何れまた改めまして」と言ふかと思ふと、はや立上つた、醫師は初音へ丁寧に辭儀をして、後に續いた

彦左衛門は門を出ると、直様醫師の傍に寄り、聲を潜めて「岡本さん、如何です「貴君は何から女でないとお考へおすつたんです、途方もない、あれは立派な女です「えッ、矢張り「少しも疑ふ處がないぢやありませんか」

彦左衛門は辭も出ないで、かつくり首を歪めたが、その落膽した顏はなかつた

第三十

彦左衛門は醫師に分れて、直に栃嚴寺に到り、妙諦へ面會を乞入れた

妙諦は早速我が居間へ通して「佐々さん、貴君は一昨日入らつしやいましたから、今日は此墓參でもありますまい、何か急な用が「はい、實は今日は伺ふ積ではございませんでしたが、是非お耳へお入れ申さなければなりません事が出來ましたので、俄に途中から參りました「はゝア、どんな用で

彦左衛門は順序を立てゝ、關の家の三不思議と、初音を男と思ひ違へた顚末とを詳しく語つた

妙諦はぢつと圓顏を傾けて「へゝえ、それは成程奇體盛で、有るまじき

事でございますねえ、併しその內の一ヶ條、女が殺されて居たと申す事に就いては、私も警部から呼立てられまして、現場へ參りましたから、能く存じて居りますが、全く魚屋の者の粗忽で、痕形もなかつた事と分りましたので、私もそれ限で忘れて了ひまして、貴君にはその後何度もお目に掛つて居ながら、申上げないで居たはどの事で、それだけは取るに足りない間違でございます「左樣でございませうか、私は只今仰しやつた魚屋の者に直々聞きまして、眞實有つた事のやうに存じますが……「いえ、併し外の二ヶ條は有つた事でございませうが、實に不思議千萬でございますねえ、私は裏合の所に居ながら、只今始めて承りました「それは左樣でございませう、出世間のお身の上でございますから、目と鼻との間の事でも、御存じないのが御當前でございます、何にいたしても不思議な事で、男と存じたのは間違ひましたが、矢張り私はあの人間にも疑念がございますし、また家にも何か曰があるだらうと存じます「私はその女の方の事は存じま

せんが、あの家には少しも御疑念のあるやうな事はございません、先隠居が久しく住んで居られて、何事もなかつたのでございますから「へえ、お詞ではございますが――死骸の事は嘘にいたしましても、現に日下の女が、二階へ上つたまゝ居なくなつたんでございますから、家の所爲とよりは思はれないかと存じます、私の女の不都合は人間が相手、日下の女の方は家に拘つた事だらうかと……」「私はさうではないと思ひますが「はい、ではまづその事は二段に致しまして、私の方の事件は、人に知られては面目を失ふ事でございますから、密に相手を尋ねやうと存じて居りますが、日下の方は、さのみ外聞を厭ふには及ばない事でございますから、遂には警察へ持出して、表沙汰にする樣子でございます「さうなつては眞に……當寺の持家で左樣な事のあつたのが、世間へ知れましては……「さア、私もそれを存じますので、今日だけ日下を抑へてございます、表沙汰にされましては、尊いお寺のお名折になりますから、初音の男か女かを見分けるま

でとゞまして、一時抑へてはございますが、私の見込が違ひました上は、もう彼方も訴へるでございませう、それゆゑ私は相談に出ましたので、どういたしたものでございませう「是非それは穏便にして頂きたいもので「宜しうございます、そのお詞がございますからは、何とか日下を說きまして……併しこのまゝで濟ませます事は、私の方も日下の方も出來ませんから、明日は双方一所に關へ參つて、初音へは嚴重に談じ付け、また家も綿密に調べて見る事にいたしませう、もう明日は腰を据ゑまして、片が付くまでは引取らない覺悟で參りませう「どうか左樣にでもなすつて、跡の何のとゞす事のないやうに願つて置きます

彦左衛門は堅く諾して寺を辭し、それより入谷の日下へ行つて、我が失敗の事を話し、なほ明日の手筈をも打合せた

第三十一

彦左衛門は昨日兼子と相談をして、今日の午前九時に先方で落合ふと約して來たので、丁度その時刻を計つて關の家へ行つた。兼子はすでに來て居たが、内へも入らないで、下女と共に、格子の外に茫然と立つて居た、

彦左衛門は怪んで「日下さん、貴女は何故左樣な所に立つて居らつしやいます「おや、佐々樣」と兼子は丁寧に腰を屈めて「昨日は故々お立寄下さいましたのに、お構もヲしませんで、とんだ失禮……「まア御挨拶は……何故お入りなさいません「はい、お師匠さんがお出掛けなつすたと見えまして、御覽の通り、戸が閉つてございますので「ひゝ、成程「御門も閉つてございましたが、押しましたら明きましたので、此處まで入りまして、また出直さう歟、どうしやう歟、貴君がお越しなすつたら御相談ヲまさうと、御待申して居りましたので「へえ左樣ですか、婆やを連れて買物にでも出たんでせうから、暫く待つて居ませうかねえ

丁度この時口入屋の内儀が來て「おや〳〵、日下樣の御隠居樣、これは

貴君樣」と双方へ會釋を爲て「貴方樣方も御用で入らしつたんでございませうが、まだお歸りになりませんねえ」兼子「さア、何處へ入らしつたんだ歟「こりやア御隠居樣、また變でございますよ「おや、變だとは「昨夜の事でございますが、此方の御新造さんが、あの耳の遠い婆やさんに郵便を入れて來いと仰しやつて、端書を持たせてお出しなすつたんださうでございます、婆やさんはつい彼處の郵便箱まで行つて、すぐ歸つて參りますと、もう貴女、此處の戸も水口の戸も閉つて居たんでございますつて、おや、もうお寢りなすつたんだらうか、締出を喰つたんだらうかと思つて、水口の戸を明けましても明きませず、辭を掛けてもお返辭がございませんから、急にお買物にでも行らつしたんだらうと、表へ出てお歸りを待つて居たさうですが、一時經つても二時經つても、中々お歸りなさいませんので、昨夜は自分の家へ歸つて寢まして、今朝早く御門の所まで參つて見ましたけれど、矢張り戸が締つて居ると申して、世話をいたした妾方へ、ど

うしたもんだらうと言って參りましたから、ちやァ樣子を見て來やうとヤシて、只今妾が參つたんでございますが、まだお歸りがないとして見ますと、こりやァまた變でございますよ

彦左衛門は傍から「成程、それは變だ「また御新造さんも消えてお了ひなすつたんぢやァござんすまいか「そんな事も」と言ひながら、彦左衛門が戸に手を掛けると、がら〳〵と明いたので「はゝァ、此處の締は爲てない、日下さん、兎も角入つて見やうぢやありませんか「左樣でございますねえ」と言つたが、兼子は無氣味で進み難ねた

彦左衛門は一人で入つて、下も二階もさつと見回り、無き顏で引返して「もし、日下さん、夜逃です、荷物を持つて夜逃をしました「ふや〳〵、へゑ――」内儀は頭を掉つて「いえ、そんな筈はございません、婆やさんが郵便箱へ行つて參ります間が、いくら掛りますもんか、あの人の遲い足でも十分とは掛りません、そのわづかの間に貴君、あの澤山なお荷物を持出すなんぞは、どうして〳〵、出來ない事ぢやァございませんか「だつて荷物が見えないのだもの「でも妾は何でございます「矢張り日下樣のお御さんのやうに、お妾が消えて了つたんぢやァないだらうかと……「だつて荷物までが一所に消えも爲なからう「それも左樣でございますねえ、併し些と暫くの間に荷物まで持出すなんぞは、兎ても人間業ではございませんねえ

第三十二

兼子は心配に堪へない樣子で、なは格子の外に立つて居るので

彦左衛門は内から聲を掛けて「日下さん、貴女さうなすつても居られますまい、兎に角此方へお入りなさい、こんな事になつて見ますと、またその積に爲て、何とか別に御相談を仕換へなくつちやなりませんから

兼子はやう〳〵入つて、玄關へ上つたが、打萎いで默つて居る

日入屋の内儀も付いて上つて「此處は何だつてまたこんな不思議な事は

かりが續くのでございませう、變なお家でございますねえ、矢張り祟でございませうよ」と怖々奥を覗いて「成程、精麗に何にもございませんねえ、おや、此方の三疊の方に、汚ならしい包がございますよ、あれは婆やさんの荷物でございませう」彦左衛門「はゝア、そんな物がありますか「ございますと、内儀は早速風呂敷包を取つて來て「矢張り左樣で、見覺がございます、是は婆やさんので」と中を開いて「おや、お金が二圓とこんな書付が……　ばアやのおきふさん、あら、貴君、婆やさんのお給金を置いて行らしつたんでございます、本人が少しお借り申して居るやうに言つて居りましたが、それもお差引なさらないで、まだ此月へ入つてから間もございませんのに、一月分をみなお遣り下さいました、こりやア夜逃でも流儀が違ひますねえ、外々のはお金がないから逃げるんですが、この樣子では御新造さんはお金が御不自由でもないらしいのに……此方は何處までも變つて居りますのねえ「そりやアさうさ、世帶が苦しいから逃げたんぢゃ

アない、私達に責められるのが苦しいから逃げたんさ

兼子は涙聲で「佐々樣、今日は是非とも調べて遣ると仰しやつて下さいましたが、肝心のお師匠さんに逃げられまして、もう蝶を尋ねる手掛がなくなつて了ひました、どうしたものでございませうねえ」とはろりとして俯向いた「まア、まア御心配なさいますな、蝶子さんがお消えなすつたのと譯が違つて、初音は荷物を持つて逃げたんですから、尋ね出すのに造作はありません、そりやア成程、五分や十分の間に荷物を纏めて逃げたとすると、餘り事が素早過ぎますから、矢張り何だか不思議が纏つて居るやうで、容易に尋ね出せなからうと言ふやうなものですが、よほゝ〳〵した婆やの外には、誰も人目のない家ですから、前々から、少しづゝ荷物を躾して置きましたらうし、また昨夜も、そつと荷車の用意まで爲て置いて、婆やが端書を持つて出て行くと、直に殘りの荷物を積んで逃げたんでせう、逃げて何處かへ隱れたんでせうから、早速心當を調べて、私が屹と尋ね出

します、それに私の方こそ、彼奴を見付け出さないぢやァならないのですが、貴女の方のはこの家に疑があるんですから、家が消えるとか、家が逃げるとか爲ない限は、調べる道が盡きたんぢやァありません

丙儀は傍から口出をして「でも何でございますよ、こんなに變な事ばかりある家でございますから、またどんな事でねえ、一晩の内に無くなつて了つて、墓原になつて居るかも知れませんよ」彦左衛門は憤として「これ　これ脇から餘計な事を言つて、日下さんに御心配をさせちやァ困る、そしてもう用はないんだらうから、お前さんは歸つて下さい「へい、ぢやァ妾はもうお暇をいたします、このお金を見せて遣りましたら、婆やさんがさぞ悦ぶでございませう、御新造さんのお夜逃を悦びますのは、廣い世界に婆やさんばかりでございませうよ、おはゝゝゝゝ、ぢやァ御隠居様、貴君様も」と兩人へ辭儀をして丙儀は歸つた

後で彦左衛門は我が車夫に命じて、初音へこの家を貸した時、請人にな

つた男を呼びに遣つた

第三十三

初音の請人は和泉町の煎豆屋の老爺で、車夫に誘はれつゝ心直調で出て來た

彦左衛門は辭退する老爺を強ひて上へ呼上げて「委細は使の者にお聞きなすつたらうが……「へい、どうも飛んだ事でございまして「初音が夜逃を爲さうなのを、前からお氣付ぢやァなかつたですか「ど、どういたしまして、こんな事をされましちやァ、私の迷惑になる事でございますから、些とでも氣付きましたら、内々貴君のお耳へ入れるのでございます、へい「さうですか、一體何處へ逃げて行つたか、そんな風では、ほ存じはないでせうが、お心當でもありますまいか「ございません、實は私は深い縁合ぢやァないんで、縁なく頼まれましたから、請人になりましたが、こんな

迷惑が掛る事を知りましたら、謝絶るんでございました、御覧の通の身薄い者で、兎ても家賃の溜つたのをどうするといふ力はございませんから、私へお掛合下さいましても……「いや、その御心配は入りません、損を掛けられて居るのなら、そりやア請印の係があるから、何とか御相談を持掛けるかも知れませんが、三十圓といふ敷金がそのまゝになつて居ますから、逃げた初音の方が損を爲て居るのです、それゆゑいよ〳〵行方が知れないと極つたら、精算をして、殘金はお前さんへ渡します「いえ、そんな金をお預りやしましては、却つて迷惑をいたしますから、どうかそのまゝにお置き下さいまし、何しろまア家賃が溜つてなかつて、私は安心いたしました、私の方では、安心とは行かないので困ります、此處は近所のない所だから、樣子を聞いて見る家もなし、つい眞合の大家さんで聞いて見やうにも、極々世事にお疎いお寺の事だから、承りに出ても御存じのない事は分つて居ます、だからお前さんを便に爲て居たので、せめて心當りゝ

は知つて居なさるだらうと思つてたんですが……併しあの初音とは、どんな所から心安くなりなすつた「それは何でございます、またあの人が和泉町で茶や花の師匠をして居ました時、太田さんとやすお家の御隠居が、何でも妾にしたいと仰しやるので、私が是非なく世話をいたしまして……「えッ、初音を妾に世話を爲なすつたのか「へい「ぢやア初音は老人の妾になつて「左樣でございます「こりやア驚いた、夫に死なれてからは一人暮だと言つて居たが、旨〳〵一ばい陥めやアがつた、妾なんぞを爲て居る奴とは……ねえ日下さん、驚いたぢやアありませんか「ほんとに妾も驚いて了ひました「私はお寺の下男に騙されたんですが、そんな奴を身持の正しい女だ、多佳の手本になる女だと思つて、あれを預けたのが不念でした「一妾も男出入のないお家だと聞きまして……

彦左衛門はまた老爺に向つて「そして、今もその老人の妾で居るのですか「いえ、その方は間もなく手が切れて了ひました、併し矢張り誰かの妾

になつて居るに相違ございません、さうでなけりやァ、師匠位であの生活は出來ませんもの「成程、そして此處へ來るまでは露月町に居たと言つて、たが、和泉町から芝へ越したんですか「いえ、和泉町から御徒町へ越しまして、それから此方へ參つたんでございます「ぢやァ露月町も嘘か、全體何處の產です「靜岡縣の士族で、元は沼津に居ましたさうで「それぢやァ沼津へ逃げて行つたでせうか「私は其處までの事は存じません、たゞ一度妾に世話を爲ました縁で、請印を頼まれたゞけの事でございますから「その老人と手の切れたのは何日でした「三年も前で、御徒町へ越す時でございました「ぢやァ三年以來引續いた旦那があるのだ、その男が此處へ通つて來て」と言ひさして、彦左衛門は忽ち眉を顰め、兼子と顔を見合せた

第三十四

彦左衛門は煎豆屋の老爺を歸して、兼子の方へ向直り「ねえ日下さん、

人の言ふ事はゞ當にならんものはありませんねえ、この家は男は決して出入を爲ないとは――初音や多佳の言ふのはその譯ですが、お寺の下男や魚屋の內儀さんまでが、受合つたやうに言つてましたけれど、みな間違つて居ました、私は初音が男でなかつたので、ぢやァ多佳の相手は誰だらうと、途方を失つて了ひましたが、今やう〳〵分りました、初音の旦那といふ奴が此處へ來て、多佳を孕ませたんです「どうも左樣と見えますねえ、妾もあの口入屋の女の申したのを信じまして、男は決して出入を爲ないと存じて居りましたのに「いや、實に飛んだ師匠に掛りました、昨日のお約束では、今日は此處で初音を責めて、お互に手掛を得なければ埒かない積で居ましたのに、肝心の初音に逃げられて了つて、大きに當が外れました、だが旦那のある事を聞出しましたから、まづ手掛があつたやうなものです、あの老爺が今の旦那の事を知らないだけが殘念ですが、少しは見込が付いて來ました、併しこれは多佳の方のみに關した事で、樣子さんの方の手掛

にはなりませんが、疑を掛けて居るこの家が丁度明きまして、研究するのに都合が宜しいから、貴女にしてもお悪くなつた方ではありません「はい、これは左様でございます、妾はお師匠さんに逃げられまして、大層力を落しましたが、元々この家が怪しいのでございますから「左様ですとも、お寺ではそんな事はないと仰しやいますが、私はこの家が業をするのだと確信して居ります、それで斯うしやうぢやありませんか、まづ旦那といふ奴を尋ねる積ですが、何處の人間だか分りませんから、兎も角初音を捜る事にして、私はその方を引受けますから、貴女は暫くこの家へお移り下すつて、何か怪しい所がないか、静にお捜り下さいませんか

「えッ」と兼子は目を呼つて「妾にこの家へ引越せと仰しやいますか「なに、當分です、何かお捜り出し下さるまでの間で、長い事ではありませんの」「だつて貴君、氣味が悪いぢやアございませんか、あのお師匠さんが能くまアお住居なさると存じて居りましたはどの家へ――況して蝶が消えて了

ひましたやうな家へ、どうして妾が住まはれませう、當分と仰しやいますけれど、たゝ一日だつて厭でございます、只今でも左様で、貴君が居らつしやいますから、うして居ります、早速逃げて歸ります「左様ですか、實は私が來れば好いのですが、初音を尋ね出さなければなりませんし　それにそれ、妾が多佳に付いて王子の方へ參つて居て、宅には雇人ばかりですから、此處へ來て居るといふ事が出來ませんので、また貴女の方でアすと、ぼ隠居のお身の上で、お宅をお明けなすつても、少しもお差支はないのですから……「そりや左様でございますけれど、兎ても妾には……はい、妾の方の用向に、斯様な勝手な事をアしましては濟みませんけれど「あ、さうお取り下すつては困ります、貴女の方の用向だから貴女に、と言ふのではありません、私は參られず、また世間へ知らせたくありませんから、他人には頼まれずとアすので、つい貴女へお頼みアしましたが、ぢやア何とか繰合を付けまして、私が參る事にいた

しませう「へえ、それでは餘り恐れ入りますが……」「いえ、どう考へても他人に頼むのは厭ですから、時に日下さん、捜索願の事ですが、お寺では名譽に關るからと仰しやつて大層心配なさいますから、あれは今暫くお見合せ下さいませんか「宜しうございますとも、妾の方の爲に、ほ用の多い貴君が御苦勞下さるのでございますから、倅を諭して控へさせますでございませう、併し貴君は何日から此方へ「是非明日から參ります

第三十五

彦左衛門は初音の行方を捜らせる爲、今は我が管理する會社の書記で、元は探偵を勤めて居たといふ男を呼んで、まづ初音が以前住んで居た御徒町から和泉町の方を捜つて、彼處で手掛を得ない時は、彼の故郷の沼津までも行けと命じた

そして一方は怪物探檢の支度をして、當座假住の心得で、僅ばかりの荷

物を運ばせ、不在宅は親戚の者に守らせて、丈助といふ個强な手代と、二人の下女とを引連れ、いよ〳〵楞嚴寺裏の家へ移つた、但し移つた眞意は丈助だけに打明けて、下女には業務上の都合に依つてと言つてあるのでさて信心者の彦左衛門は、鞄の中から持佛を取出し、下の奥座敷の違棚へ安置して、數珠押揉んで禮拜をしてから、座敷の眞中へ坐つて見て「丈助どうだ、住工合は悪くもないねえ「左樣でございます「だが大きなほ本堂の陰になつて居るので、陰氣な事は恐ろしく陰氣だよ

丈助は下女を憚つて聲を潜め「併し旦那樣、少しも變な樣子は見えませんでございますねえ「そりやさうさ」と彦左衛門も聲を潜めて「見た所では何ともないさ、だが何か有るに相違ない「何れ夜になりますと……「いや、日下の娘が二階で消えたのは蛮だと言ふから、蛮の方がなほ怪しいかも知れない、お前一つ二階へ行つて、試に消えて見ちやアどうだ「御冗談「はゝゝゝゝ、どうか早く驗が見えると好いが、何日までも此處に

居なけりやァならんやうぢやァ、宅の用が運ばなくつて困る「御注ぢやない
お身體でございますから「こりや冗談ぢやァない、此處に斯うして居るよ
りは、いつそ二階へ行つて居やうよ、ねえ、二階の方が怪しいんだから、
用心の刀を持つて行つて居やうよ、そして彼處で一石遣らう、碁でも打つ
て居なくつちやァ徒然でならない
やがて二人は大葛籠を開いて、二腰の刀と碁盤とを取出し、二階へ運ん
で碁を打始めた、その内日も暮れ、夜も次第に更けて來たので、彦左衛門
はその六疊の間へ床を展べさせ、丈助は次の三疊、下女二人は下の茶の間
で枕に就いた、それまでは何事もなかつたのだが、十二時過になると、家
がゆさ〳〵搖出した
彦左衛門はすぐ目を覺して、丈助、丈助「へい、地震でございますね「さ
うだ、強くなつちやァ大變だから、今の内に戸を一枚明けといてくれろ
丈助は直に起出て、窓の戸を引明けた、彦左衛門はなほ寢間に坐へて居

たのだが、家の動搖が急には止まないので、遂に窓の傍へ行つて、何心な
く星明の空を見やうとして「おやッ」と疑訝の聲を放つた
「旦那樣、何でございます「こりやァ變だ、搖るのはこの家ばかりだよ、
その他本堂を見ろ、少しも動いちやァ居ない「な、な、成程「全體地震と
いふものは、大きい建物ほど強く應へるもので、小い家の人は知らないほ
どの地震でも、この他本堂なんぞは恐ろしい響がして、目に見えて搖れる
もんだのに、ね、そら、音も爲ないし搖れも爲ない、こりやァ變だ「あ、
旦那樣、奇體です、この御廟の松の樹だつて動きやァいたしません、他覽
なさいまし「む、なァる程、この家だけが動くんだから、こりやァ丈助、
爭はれないもんだ、いよ〳〵怪物の所爲だぜ、早速遣つて來やァがつた「餘
り早過ぎますねえ「ほんとによ

第三十六

やがて家の震動が止んだから、彦左衛門は窓を離れたが、直には横にならないで、床の上に手を組みながら「どうも意外だ、何か不思議を見るだらうとは思つて居たが、今夜早速とは思の外だつた、何しろ餘り氣味の好いもんぢやァない」

丈助は窓を閉めて、彦左衛門の傍に坐り「實に爭はれないものでございますね え、私も今夜あたり斯樣な事があらうとは、存じませんでございましたが、餘り速かなんで、面喰つて了ひました」「全く、それに己はもう一つ意外に思ふ事があるんだ、早速驗を見せられたのも意外だけれど、この家の搖れたのも意外なんだ、誰も知らない内に人間が無くなつたと言ふ先例があるんだから、また今度も此方の氣付かない内に、奇體な事があるんだらうと思つてたんだが、新手を出してゆさ〳〵と來られたので、驚を遣した」「左樣でございます、私も地震だと思つたものでございますから、寢床の下へ入れて置きました刀を、出すのさへ忘れて了つて居りました」「ひ

ひ、己もさうだ、併し刀を出して拔いた所が、何處へ斬付けると言ふ所もないのだから、矢張り何にもならないのさ」「大きに左樣で、斬付けるといふ事も出來ませんし、取つて伏せると言ふ事も出來ないんでございますから、どうして退治やうにも、法が付きませんでございますねえ」「ひゝ、さうだ、法が付かない、併し丈助、意外は意外だつたが、まづ己の見込は當つた、お寺ではそんな事はないと仰しやるんだが、この家の何處かに怪物が住んで居るといふ事だけは、これでまづ確に分つた」「そりや左樣でございます、これは秘密でございますから、誰にも申してはございませんが、もし斯ういふ用で此處へ來たと話しましたら、今の世にそんな馬鹿氣た事があるものかと申して、嘘はない者はございますまい、そんな奴を連れて來て、見せて遣りたい位のもので、これは旦那樣、明日でもお寺へそつとお話しなすつたら如何でございます、矢張りさうかと仰しやつて、屹とお驚きなさいませう」「いや、そんな事はないと仰しやるんだから、是位の事

ではまだ申上げられない、もう少し試して見て、正體を見屆けてからでなくつちや「それも左樣でございますねえ「併し丈助、考へて見ると、己の腑に落ちない事がある、毎晩こんなに家鳴震動した日には――いや、一晩でも震動した日には、女の初音が如彼長く住んで居なかつた筈だ、まだ最中搖れて居る内に、早速逃出して了つたらう「へい、さう承つて見ますと、初音だけぢやアございません、お家のお縁樣もまた同樣で、すぐ逃げてお歸りなさりさうなもんでしたが……「さうだ〳〵、さて見ると、今までは こんな烈しい荒方はなかつたんかい知ら、む、成程、さうだらう、女ばかりで顧其しかつたもんだから、怪物の方でも――別に遠慮をするといふ事もなからうけれど、まア腹も立たないから、今夜のやうな手荒い事は爲なかつたんだらう、所が此方は大違で、何でも正體を見顯して遣らうといふ心があつて、害意を含んで乘込んで來たんだから、怪物の方でも腹を立てゝ、汝、目に物を見せて遣らうと言ふので、こんな事を爲て騷すのだらう「全

くそれに相違ございません、へい、屹と左樣でございませう「あ、丈助、下で下女の話聲がするやうだが「成程、何か言つて居るやうでございますねえ「はゝゝ、能く寐る下女共だが、流石今ので目を覺したんだ、だが戸を明けたやうではなかつた、外の方は見なかつたらうから、氣が付かないに相違ない、全く地震だと思つてるだらうから、まづ言はない方が好いよ「へい、申しませんとも、こんな事を正直に言つて聞かせましたら、二人は揃つて腰を抜かして了ひませうよ

第三十七

翌朝二人の下女が起きて、小間使の方は掃除に掛り、お三は釜の下を焚始めたが、二階の二人は高鼾で、容易に起きて來さうにもない

その内酒屋の小僧が水口へ來て「お早うございます、升本屋で」と小腰を屈めた、お三は膨れた頰をます〳〵膨らせ、一心に火吹竹を吹いて居た

が、それと見て「おや、酒屋さん、大層早いのねえ「へい、今日は用は……」「昨日あんなに買揃へたばかしなんだから、今日は宜しいよ、昨夜は大變な地震だつたれえ」小僧は變な顏を爲てお三を見詰めた

「おや、お前さん知らなくつて、まア能く來たもんだねえ、あの地震を知らないなんて「へえ、それは昨夜の何時頃でございました「時計を見たら、丁度十二時半だつた「ぢやアそんな事はありません「だつてふ前さん、大層酷く搖つたんだもの「いえ、昨夜十一時過に火事がありまして……「おや〳〵、何處が燒けて「おや〳〵、あの火事をば存じないなんて」と小僧は早速復讐を爲た

「あら、すぐ竹篦返だねえ、おほゝゝゝ、併し火事は何處だつたの「花川戸邊だらうと思ひましたんで、皆で馬道の所まで行きましたけれど、柳島のまだ先だとアすんで、ぢき引返して參りました「そら、そんな田舍の方だつたから知らなかつたんさ、いゝら妾だつて、東京の內の火事なら目を覺すさ、おや、火事の話で地震の話が消えて了つた、けれどまア知らない同志で五分々々さ「いえ、私は知らないんぢやありません、地震なんざアございませんでしたもの、家へ歸つたのが丁度十二時でしたが、腹が減つたもんですから、四角に居た饂飩屋を呼んで來て、若い者五人でお換りと〳〵遣つたもんですから、中々急には出來ないんで、やう〳〵皆が喰了つて、また寐直したのが一時十分でしたけれど、起きてる間に地震なんざアありませんでした、そんな事があつたら、五人が五人ながら知らない譯がございません、それに留吉てへのが大變な地震嫌で、明日の新聞にも出ないほどの小いのでも、慌アて喰つて表へ飛出す男ですが、それが矢張り知らなかつたんですもの」と小僧は堅く執つて動かない「さう、變だねえ、あんなに搖つたのに

丁度此處へ魚久のお舟が來た、昨日仕出した料理の皿を取りに來たので

お三は早速確める積で「おや、魚屋のお內儀さん、お前さん昨夜の地震

を知らなくつて「へえ、それは何時頃の事でございます「十二時半頃「強いのでございましたか「強い事も強かつたし、また大層長かつたの」お舟は小首を捻りながら「十二時半なら寐ては居りましたけれど、そんなに強くつて長かつたんなら、氣付かない筈がございませんが……少し前に火事はございましたけれど、地震なんぞは

小僧は勝閧を上げて「そら御覽なさい「ちやァ何だらう、あれは「此方樣では搖つたんでございますか「さうですよ、だが酒屋さんもそんな事はないと言ふし、またお前さんも……それではこの家だけと見えるが、まさかそんな不思議な事がねえ「分りませんよ、高い聲では申されませんけれど、このお宅は色々變な事があるんでございますよ、先の闕さんと申すのは、何處かへ逃げて行らしつたさうでございますが、それは餘り度々不思議な事がございましたんで、もう我慢が出來なくなつたからでございます

お三は「本統」と念を押して見た限で、眞青になつて了つた

第三十八

彦左衛門丈助の二人は、昨夜夜中に怪談で時を過して、二度目に寢たのが遲かつたので、今朝は八時になつてからやう〳〵起きて、目を擦り〳〵二階から下りて來た

すると小間使がお三の傍へ走つて行つて「お前さんから旦那樣へ」と小聲で言つた「あら。お前さんから上げて下さいよ「だつてお前さんは年上ぢやありませんの、さア、早くよう」と我が肱でお三の肱を突いた

お三は「ぢやァ妾から」と言つて、樣側へ顏を洗ひに行き掛けた彦左衛門の前へ手を突き「旦那樣、とんだ無理をアすやうでございますが、どうか妾共二人を、四谷のお家の方へお歸しなすつて下さいまし、お願でございますから」彦左衛門は怪訝顏で「何故、昨日來たばかりだのに、そんな事を言つてくれちやァ困る、もう里心が起つたのか、全で子供だ「いえ、

さうぢやアないんでございます、もうどうも氣味が悪うございまして……

「何故」「旦那樣も昨夜の地震を存じのやうでございましたが、あれは地震ではございませんので「へえ、どうしてお前はそんな事を言ふのだ、「外外では少しも搖れなかつたさうでございますし、それに先刻參りました魚屋の內儀さんが、このお家は變な事ばかりあるんだと……」彥左衛門は扨はと窃に顏を皺めた

「……色々話してくれまして、此方は化物屋敷だと申しますから、もう怖くつて〳〵、兎ても一時も居られませんので「成程、さうか、そんな事を聞いて怖くなつたのか、併し化物屋敷などと言ふのは嘘だよ「いゝえ、それも嘘かも知れませんけれど、地震でなかつたのは本統で、このお家ばかり搖れたんでございますから、氣味が悪くつて居られませんでございます、それで、只今二人で相談をいたしまして、もし四谷へお歸し下さいませんでしたら、いつそもうお暇を頂きまして……「さうか、其處までに

言ふのなら、宅の方へ歸しもするが、後が困るよ、捨除なんぞは丈助がするに爲ても、飯を焚く事が出來ないから……ぢやア斯うしやう、お前達が歸つたら、五兵衛と吉松とを寄越してくれろ、あの二人にお前達のする事をさせて、此處は今日から男世帶だ「それではあの二人に來て貰ふ事にいたしまして……すぐ只今から歸らして頂きます「飯がまだゝらうから、ゆつくり朝飯を喰べて、それから歸つたら好いだらう「いえ、もう澤山でございます、咽へ通りもいたしません「はゝ、大層また恐れたものだ、朝飯前に四谷へ歸るのは饑とからうが、咽へも通らないと言ふのなら仕樣がない、併しお前達が歸つても、昨夜の事は誰にも言はないでくれろ、化物屋敷だなんぞと言つちやア困るよ

二人の下女は願が叶つたので、返辭も其處々々に立上つて、着換包を取るが早いか出て行つた、後に彥左衛門の「はゝゝゝゝ」と高笑して「丈助あの二人の樣はどうだ、大きな尻へ帆を掛けて逃出したせ、餘程此處が怖

いと見える「併し手回の早い事と申しましたら、まだ旦那様のお肝も出ない内から、ちやんと着換包を拵へて置いたんでございます「はゝゝゝゝ」と彦左衛門はまた高笑

やがて二人で朝飯を済ませ、また二階で碁盤に向つて、頸に勝敗を爭つて居る内に、はや本宅から下男と抱の車夫とが出て來た、で、その夜はいくらか心强く寢に就いたが、前夜と同じ刻限になると、また家が音を立てゝ搖出した

第三十九

彦左衛門は忽ち起直つて刀を引付け「また進つて來た、丈助、起きて居るか「また今夜も搖出したねえ」と言ひつゝ、丈助も一刀を提げて、慌てゝ出て來た「併し不思議だねえ、固り不思議には極つて居るのだが、全體怪物は何處にどうして居て、こんなに家を動かすのだらう、分

らないねえ「左樣でございますねえ、天井に居るにいたしても、床の下に居るにいたしても、兎ても斯う地震のやうに動かせる譯がございません「さうさ、手を掛けた位の事で、この家が搖れは爲ない、この怪物は劫經た奴で、手足を働かせると言ふのではなくつて、何處か離れた所に居て、心で斯うしやうと思ふと、何でも思ひ通りになるんぢやアあるまいか「左樣な事でございませうか、何しろこんな風でございますと、何日まで經ちましても、怪物を見顯す事が出來ない譯でございますから、斯うして參つて居りましても、實は何にもならないと申すやうなもので」と丈助ハはや弱い音を吐いた「ひゝ、それもさうだ」と彦左衛門も頷いた、是もどうやら不氣味になつて來たらしい

「旦那樣、これはいつそ楞嚴寺樣へお願ひなすつて、法力で退治て頂く事にでも「さうだねえ、見顯すまでは申上げない積りだつたが、もう兎ても己遠の力では行かないから、明日は早速僧正樣へは面會を願つて、新

禍をお頼みやす事にしやうよ「それがお宜しうございませう、明日は念の爲に、天井や床下を調べて見やうと存じますけれど「そりやア調べて見るのも好いが、鼠の死骸を見出す位が落だらう、何しろ通力自在の奴らしいから、すゞ姿を隠して了つて、そしてまた夜に入るとこんな事を爲て、全で此方を慰み物に……あッ、若や是は……」と言ひさして、彦左衛門は忽ち顔の色を變じた

「な、何でございます、旦那様」彦左衛門は丈助には答へないで「解めた、屹とさうだ、多佳子がそれで姙娠……今さう極めて見ると、相手の男を明さないのも、またこの家で女の死骸のなくなつたのも、日下の娘が消えたのもみな一時に原因が分つて了ふ

丈助は怪しんで「何でございます」と又問うた「多佳子の相手は初音の旦那だらうと思つたが、姙娠させたのは人間ではない、この怪物だ「えッ、そんなお心當が「付いた、何も彼も心當が付いた、まづ始めの死骸の事から順を立てゝ言ふと、この怪物が何處かの女へ執念を掛けて魅入つた、けれどその女が望に從はなかつたので、怒つて身體を引裂いた處へ、魚屋の爲吉が來て驚いたんで、後で死骸が無くなつて居たのは、怪物が直に何處かへ取捨てゝ了つたんだ、また日下の娘も魅入られたんだが、是は何處かへ連れて行かれて居るに相違ない、怪物は今夜のやうな不思議を見せる奴で、通力自在なんだから、二階に居た娘を引攫つて、空を走つて何處かへ隠して慰んで居るんだ、多佳子も執念を掛けられて、慰まれて孕んだんだから、相手が明されない譯さ、明したら引裂かれるかも知れないんだから……此間秋子がこんなやうな事を言つたが、殘念ながら言當てたよ、何しろ大變だ、多佳子はまだ引攫はれなかつたいけ幸だが、とんだ物の子を孕して」と彦左衛門は投首をして愁に沈んだ

さて翌朝は四人掛で、念の爲に家中隈なく捜索したが、鼠の死んだのも見當らなかつたから、彦左衛門は遂に楞嚴寺へ行つて、深く尊崇する觀音

僧正に謁し、悪魔降伏の祈禱を頼んだ、で、今夜は何事もなからうと思つて居ると、また同じ時刻に一入烈しく搖出して來たので、僧正様のほ法力をも恐れないばかり敏、却つて逆ふほどの奴には油斷がならないと、彦左衛門も丈助も慄へ上つて、今は逃支度を爲始めた

第四十

彦左衛門は翌早朝より家引拂の用意に掛り、丈助等に差圖して、早くも荷造をさせて了つた

丁度其處へ兼子が來て「おや、お引越は一昨々日だつたらつと存じまして、今日はどんな御樣子だか伺ひに參つたのでございますが、何かお差支でもございまして、只今入らしつたんでございますか」と慇懃へて問うた、

彦左衛門「いえ、今逃出す所なんです、參つたのは矢張り一昨々日でしたが、どうも氣味が惡くつて、我慢が爲切れなくなりましたから「おや、それでは矢張りあの」と兼子は目を瞬つて「何か不思議な事でも「有つたところですか」と彦左衛門は手眞似を加へて、遠夜震動の事を話した

「おや〳〵、まアそれは、へえ——、矢張り左樣な……だから妾にこのお宅へ來て居よと仰しやいました時、あんなにお謝絶りやしたのでございます、妾なら最初の晩に氣絶いたして、そのまゝ死んだかも知れません「いえ、實は私も命を縮めました、何しろ僧正樣の御祈禱にさへ逆ふほどの奴ですから、うつかり此處に長居をして居ましたら、遂には私までも引裂かれて了ひます「あら、引裂かれるつて、何故貴君「これは私の考ですが、例の女の死骸ね、あれは怪物が引裂いて殺したんです、そして蝶子さんは、全く怪物に魅入られなすつて、何處かへ引攫はれて行つて、慰まれて居なさるんで、多佳も同樣で、姙娠させられたんだらうと思ふのです「そ、そんな事でございましたら、實に大變でございます、蝶もまた姙娠でも……

……「それは何とも知れません、とんだお氣の毒な事ですけれど……實

は今初音を尋ねに出してありまして、もう四日になりますから、今日明日には歸つて來る筈ですが、私の考のやうですと、尋ねに出したのは無益でした、多佳の相手は初音の旦那ではないと分つて居ますと、初音が何も知らないと言張つて居たのは其筈でした。それもこれも怪物の業ですから、知らないのが當前です「それならお逃げなさるにも及びますまいのに「ですがね、初音は私等から責められるのが辛いので、それで逃げたんでせう「へえ、若やお師匠さんもお引攫はれなすつたんではございますまいでせうか「なに、あれは自分で夜逃をしたんです、同時に賭道具が無くなつて居ましたもの、いくら怪物だつて、まさか道具まで引攫へやしますまい「それも左樣でございますねえ、時に佐々樣、是はどうしたものでございませう「私はなほ能く僧正樣へお願ひす積です、怪物の怪力と法德のある方の御法力とは、兎ても一つにはなりませんから怪物は一旦は逃ひましても、遂には御法力に負けて、脆く退治られて了ひます、さうなれば私も少しは

恨を報う事が出來ますし、また蝶子さんも、怪物の手からお離れなさる事が出來るのです「左樣でございませう歟、ぢやアもう只今では、警察へ願つても無益でございませうかねえ「さうですよ、遠からず歸つて入らつしやるに相違ありませんから、彼是お迷ひなさらないで、有難い僧正樣へお願れなすつて居らつしやい、その内屹と御靈驗がありますから「ぢやアまアその心得になりまして、妾も蔭ながら信心をいたしませうよ「さうなさいまし、叶はぬ時の神願ですから

兼子は遂に無二の歸依家彦左衛門に化せられて、僧正の法力に望を繫いで立去つた、彦左衛門は直に楞嚴寺へ行つて、僧正へなほこの上專心の祈禱を乞ひ、さて家を引拂つて四谷へ歸つた

其日爲吉の親が四谷へ體に來ての話に依ると、爲吉の病氣は少し輕快に向つたさうだ

第四十一

初音を捜索に行つた男は、何處でも手掛がなかつたさうで、空しく引上げて來たが、彦左衛門は今は初音を重く見ては居ないのだから、格別落膽も爲なかつた、但し日下へば早速報じた

さて彦左衛門が專ら樂み、また專ら悲むのは、僧正の法力の顯れる日と、多佳子がどんな子を產むだらうと言ふのとだ、併し出產の方は、いくら急つても、臨月を待つより術がないのだから、決して諦められないのを、當分諦めては居るが、怪物退治の方は、どうも待遠しくつてならないのだ、で、妙諦まで手紙を出して問合せたり、暇があると、自分でも出掛けたり爲て居るのだけれど、半月經つても一月經つても、更に靈驗が見えないので、流石の佛法心醉家も、否、無二の諦翁信仰家も、是には大いに落膽して、やゝ信を翫ますやうになつた

或日僧正の法力を疑ひながら、楞嚴寺から宅へ歸ると、思も寄らない爲

吉が出て來たので「やア、お前だうした、もう病院から出ても好いのか」と怪しんで問うた

爲吉は畏つて平蜘のやうになり「へい、旦那、どうも有難うございました、お前さんのお蔭で、すつかり快くなつ了ひまして、今日病院から出ましたから、些とお禮に來ましたんで、へい、こんな嬉しい事はありませんです「さうか、それは好かつた、全快したとは己も嬉しい、これ、丁度お前に話すが——あの死骸の一件だが、楞嚴寺樣で承つて見ても、あれは嘘だと仰しやるけれど、己はお前の言ふ通りに相違ないと思ふんだ、何しろあの家が怪しいんで、まだ外にもこんな不思議が」と深夜に家の震動する事を語り始めた

爲吉ハはや身慄をして「旦那、御諦だから、もうどうかそんな事は……

……「え、話してくれるなと言ふのが、何故だ「私は何なんで、そんな事はたい話だけでも怖くつてならねえんで、へい「はゝゝゝゝ、そんなに

怖いのか、ぢやァもう言ふまい、お前は例の死餓で臆病付いたんだね、時に己は初昔を疑つて居たから、お前の病氣が快くなつたら、證據人になつて貰はうと思つて居たんだが、彼奴夜逃をして了つて……「え、あの御新造さんが、へえ——「なに、あのまゝ彼處に住んで居ても、お前を證據人にする必要はなくなつたんだ、併しこの後心當でもあつたら、そつと言つて來てくれろ「へい、承知しました、ぢやァ旦那、何れまた上りますが、今日はもうお暇にいたします「さうか、まァゆつくり爲て行くと好いが、遠方だから、無理に止めても惡からう、併しお前はこの後何をする積だ、また奉公にでも出るのなら、己の方へ置いて遣つても好いが「いえ、もう奉公は懲々しました、主人を持つてへと、夜でも使に出なくつちやなりませんから「はゝ、大層懲りて了つたもんだ、ぢやァ矢張り瀧の川に居て、親の農業でも手傳ふ積か「なに、家で田地を持つてるんぢやァなし、みんな人の處の小作で、それも父と兄とで出來るんだから、おあい屋を遣る積なんです「何だ、おあい屋だ、はゝゝゝゝ、お前がおあい屋をするのか、いや腦に病の起り易い者には、おあい屋も好いだらう、極氣樂で、頭を痛めるやうな心配な事はないのだから「私はそんな考も何もねえんですけれど「なに、好いさ、おあーいッと言つて、たゝ呼んで歩くのが資本で、糞尿を無價で貰つて歸るのだから……家業の種類も隨分多いが、これほど伸氣な世渡はなからう、はゝゝゝゝゝ

第四十二

佐々の家では處々に破損が出來たので、數人の大工を入れて、繕ひ普請に掛らせた、今は食後の休息時間で、棟梁の五八といふのが一同へ熱心に話して居る、この男は瀧の川の爲吉とは反對で、至極强がりの力自慢と見えて、腕を叩いて手柄話を爲て居るので

すると聞人の一人が嘲るやうに、話なかばへ詞を挿んで「はゝ、いくら

棟梁が強えたつて、暴れ馬が手綱を斷つて駈けて來るのに、大手をひろげて待つて居て、加之に馬の首根子を抑へて、横に捻り倒すなんざア……はゝゝゝゝ「いや、本統だ、其奴は信濃町の中田てへ大佐の處の馬だから、彼處へ行つて聞いて見ねえ

「五八、五八」と不意に後へ來て聲を掛けたのは、主人の彦左衛門で、工事を見廻に來て、先刻からの自慢話を聞いて居たらしく、につと笑ひながら「そんな強い事を言つて居ると、怖い所へ連つて行くぞ」と揶揄ふやうに言つた、五八は投出して居た足を屈めて「や、旦那、お聞でげしたか、あれは本統なんでげすよ「いや、どうだか……併しそれほど腕力もあつて、魂も据つて居るのなら、少し事柄は違ふけれど、一番度胸試だ、化物退治に行つたらどうだ、恐ろしい化物の居る處があるんだが「御冗談仰しやつちやア可ません、今の世に化物なんぞが……「いや、本統だ、お前の本統は當にやアならないが、此方のこそ本統の本統なんだ「へえ、旦那がそ

んなに仰しやるんぢやア……併し何處にどんな化物が居るんでげす彦左衛門は楞嚴寺裏の家の怪事を敷へて、悉く言つて聞かせた、但し姓名は某嬢とのみ言つて、さすが多佳子の名は明さなかつた

五八は矢張り信じないと見えて、自分が嘲られた時のやうな調子で「はゝ、いくら旦那のお詞だつて、そんな事がお前さん「いや、嘘だと思ふのなら、兎も角その家に住んで見るが好い、實はね、お寺の僧正樣へ御新禱をお願ひして居るのだが、どうも御靈驗が見えないので、もし己が行つて見やうといふ者があつたら、その者に見屆けさせたいと思つて居る時だから、お前が住んで見てくれると丁度好いんだ「だつて旦那「はゝゝゝゝ、矢張り怖いと見えるね「いえ、いえ」と五八は堅くなつて「何が怖いもんでげすか、全くの所、ほんとに化物が居せへすやりア、退治て見てえ方なんでげすが、淺草ぢやアがアせんか、道が遠くつて困りますもの「そりやア遠い、その代に敷金や家賃は入らない、尤もお寺の家へたゝ住んぢ

やァ冥利が悪いから、敷も家賃も納めなくつちやならないけれど、お前が住んで見てくれるなら、一切己から出して遣らうよ、三十圓に十五圓だが、それ位の事は己が引受けるさ「へえ、そりやァ旨え話でげすが、私の出入場はこの邊ばかりにあるんでげすから、毎日通つて來るのが大變でげさァ」「ぢやァ悪賞金を出さう、お前が化物を退治るか、よし退治ないまでも、姿を見付けさへしたら、褒美を百圓遣る事にしやう「な、な、なる程、そりやァ結構でげす「だが五八、お前が承知をしても、お前の所の内儀さんが苦情を言やァしなからう敵「どうして、嘸の奴は私よりか度胸が据つてるんで、そして慾張つた女でげすから、家賃が入らねえで百圓になるんだてへましたら、私は出抜いてでも行く奴でげす「はゝゝゝゝ、ぢやァ行くか「行きますともこいつァ行きもんでげす、すぐ明日からでも

第四十三

大工の棟梁の五八は、妻と子供四人とを引連れて、早くも例の化物屋敷へ引移り、大家の楞嚴寺へ挨拶に行つたで、玄道が取次ぐと、妙諦が直ぐ五八に逢ひに出て「佐々さんから勸められたとかで、あの家へ越して來たのはお前さんか」と念を押して問うた「へい、左樣で、どうか何分宜しく「何れ佐々さんから詳しく聞きなすつたらうが、あの家は死骸が無くなつたとか、人間が無くなつたとか、相手のないのに娘が姙娠をしたとか、何だか頻に厭な噂がある樣子で、それが爲に始めに住んだ關といふのは逃げて行くし、次に住まはれた佐々さんまで、夜中に家が搖れる爲に、遂に逃出されたほどの不吉な家です、それで、實は佐々さんとも相談をして、もう人には貸すまいと思つて居るのだから、折角越して來なすつたんだが、引拂つては貰はれまいか、お前さんが住んだに就いて、また怪しい事でもあつて、いよ〳〵評判が高くなると、寺がまことに迷惑をしますから……併し佐々さんのお指圖で來た人を、

此方が勝手に立たせる事は出來ない、依てお前さんが承知なら、まづ寺から佐々さんへ話をして、その上で引拂つて貰ふ事に爲ます、なほ引越に付いて掛つた入費は、いくらでも寺から辨へませうから、どうかそんな事にして下さるまいかと、實に餘儀ありさうに言つた

五八も同じく餘儀ない體で、頭を搔きつゝ「さう仰しやると何でげすが、實はその、敷金も家賃も佐々さんの方で出して下すつて、私はたゝで入るんでげすし、それに化物を見屆けますてへと、褒美に百圓遣らうと仰しやるんでげすから、早え話が、それを樂に參つたやうなこつて、へい、でげすから、旨く行きせへすりやア、却つて惡い評判が立たねへばかしぢやアでせへせんので、その評判の種が無くなッ了ふんでげすから、お寺の方でも安心なんでげす、へい「いや、それは無益な事だらうと思ふ、この寺の持家ですから、色々不思議な事が、あつた事を知つたら、早速新禱をする筈を、知らなかつたから打遣つて置きましたが、すでに佐々さんから頼

まれて、僧正が專らお新禱の最中ですから、もう遠からず化物が退參するに相違ありません、だからお前さんの心配はお無用です、それに萬一怪我でもあつたらお氣の毒だ「お詞でげすが、私は一つ手柄に遣つて見てえと思ふんでげすから……「そりやお前さんはさうだらうが、萬一家族の人が消えるといふやうな事でもあつたら、まことに詰らないぢやありませんか「いえ、實は餓鬼共が多過ぎて困つてるんでげすから、一人二人は消えてくれます方が好いんでげす、へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ「氣樂な事を言ふ人だ、はゝゝゝゝゝ

五八は一圖に懸賞の金に心を引かれて、聊かも斷念する氣色がない、妙諦も今は言つても無効だと思つたか、もうそれ限で强ひなかつた

さてその夜五八は用心の得物を持つて、一人で二階へ上つて寢たが、更けて二時も過ぎた頃、こん、こんと二つ槌いて、近くで小い音が爲た

五八は引越の爲に疲れて、鼾を立てゝ眠つては居たけれど、家震動とい

ふ念があつて、心に綏みがなかつた所爲でか、この小い音にも目を覺して「あ、搖りはしねへであんな音が、こりやァ流儀を換へやァがつたんだらうか、それとも今のが先觸で、これからゆさ〳〵が來るのか知ら」

言ひつゝ身を起して待構へて居たが、夜が明けるまで何事もなかつたので「到頭あれ限だつたが、あれッ位で濟むのなら何でもねえや、だが變な音だ、併し聞付けたやうな音だ、何だらう、此方の方で聞えたやうだが」と床からのそ〳〵這出して、地袋の小襖を開き、頸に首を捻り出した

第四十四

五八「旦那、旦那、旦那、旦那」彦左衛門「えゝ、五八ぢやァないか、その慌て樣は何だ、また大層早くから出て來たが、はゝゝゝゝ、口はどにもない、たゞ一晩で化物屋敷を逃出して來たんだな「いえ、大違でげす、百圓頂きに參つたんで「何だ、唐突に「化物の正體を見屆けましたから「え

ッ「それで車を飛ばして參つたんでげすが、實は姿を見たんぢやありません、それにまた死骸の無くなつた事だけは分りませんでげすが、堀の消えて行つた道筋から、外の娘の孕んだ事まで、すつかり見極が付い了ひました「さうか、そりやァ感心だ、たゞ一晩居たばかりで……だがどうだらう、己は三晩も續けて泊つて、少しも手掛が得られなかつたが「そりやァ旦那ぢやァ分りません、私だから見出したんで、てへと自慢のやうでげすが、全く大工の家業の德で見出されたんでげす、何しろ實地を踏に入れやうと思つて、お迎へに參つたんで「ぢやァ早速行かうよ」と忽ち車を列ねて、楞嚴寺裏の家へ駈付けた

五八は直に彦左衛門を二階へ導き、奥の六疊で肱枕をして見せながら「私が昨夜此處で斯うして寢て居ますと、何時頃でげしたか、その地袋の中だちうと思ふ所で、こん〳〵と二つ續いて音が爲ました、それがどうも金槌の音のやうなんで「はてね「私もはてねと思つて考へました、搖る筈の家

が揺らねえで、何故あんな音が爲たらう、是が先刻だらうかと思つてましたが、それ限なんで「はア、それは大きに輕くつて好かつた、化物がお前の意氣込に恐れたんかも知れない「へい、恐れたは恐れたに違へねえんで、けれど化物ぢやアありません、人間でげす、今まで色んな事をしやアがつたのは、みんな人間の業なんで「さうか知ら「さうでげすとも、旦那は何でげせう、地袋の中に細工のある事を御存じねえんでげせう「知らない「彼處に人間でおくつちや出來ねえ事が爲てあるんでげす、私は朝から地袋を明けて、目が痛くなるほど見詰めながら考へてました、所が分りましたよ、まア御覽なせえ」と地袋の前へ行つて、引違の小襖を外し「この中の壁は本堂の後へぴつたり付いてますが、外の違棚の方の壁と色は同じでも、地袋の中だけは紙張になつてます

彦左衛門は手を觸れて見て「成程、張壁だ「それがもう變なんでげす、何故この中だけが紙張になつてるだらうと、そつと叩いて見ましたが、そ

ら」と輕く指先で叩いて「こんな音が爲ます、張壁ぢやアねえ、全く襖なんでげす、そして襖の向ふにやア何にもなくつて、これ一重だけで本堂と通り抜になつてるんで、此奴をぐつと上へ上げると、往つたり來たり出來るんでげす「え、この家と本堂と「へい、待合なんぞに能くある機で、此處は三尺の張壁だと思つてると、その奥に隱れ場所があるてへ行き方と同じこつて、この本堂の方の天井裏に車が取付けてあつて、麻繩で襖を上へ吊して、そして車の上を越させて、繩の端に襖の目方だけの石が縛り付けてあるんでげすから、丁度車井戸の釣瓶と同じ理屈で、石と襖との調子が取れて、一尺上げたら一尺だけ、二尺上げたら二尺だけ上つてる仕掛なんでげす「其處が上へ明くか知ら、遣つて見な「いえ、もう明きませんや、此處を明けられちやア事が發覺るから、昨夜夜中に釘付にしたんでげす、だから私が金槌の音だてへんで、

彦左衛門は感に堪へて「はゝア、成程、いや、流石棟梁だ、お前の鑑定

には恐れ入つた、併し此處が明く〳〵とは驚いたねえ」と如何にも酷く驚いた

第四十五

五八は酷く褒められて、さも嬉しさうに笑みながら「だが旦那、私も見付け出すまでにやア考へましたよ、何しろ地袋の中なんでげすもの、通ひ道があらうたア氣が付きませんからなア

彦左衛門は張壁ならぬ襖壁をおつと見詰めて「五八、これをどうして上へ上げるんだ、今は釘付になつてるから上らないが、是までどうして上げて居たらう、手を掛ける所がないぢやアないか、本堂の方からばかり明げて、此方からは明けられないのだらうか「いえ、矢張し明けられるんでげすが、手を掛ける所のねえのが曲者なんで、へい、此處へお前さん、當り前の襖に付ける引手のやうな物を付けといて跨なせえ、はてな、何故此處に引手なんぞがと、わざ〳〵疑を起させるやうなもんでげすし、それ

に自然手垢も付きますから、ちき人に覚付かれて了ひますア、だからこの通り、決して動かねえもんのやうに見せといて、今明けやうてへ時に、笹か何かを下の方へ差込んでぐいと、少し斜明けて、それから手を入れて押上げるんで「成程、大層用心を爲たもんだねえ「左樣でげすよ、併し旦那、始終笹を差込むもんだから、下の方は少し紙が毛立つて居ます「そして笹は……些と見えないぢやないか「そんな手ぬかりはありませんや、大工に仕まれちやア大變だ、見顯されちやア詰らねえてえんで、此處を釘付にした位でげすもの、そんな疑られそうな物は、取捨てゝ了つて居ますア「ひさうだらうねえ、お前の考も行屆いたもんだ、併し五八、その先方といふ奴は、大方初音の旦那だらうが、お寺は据くつて居て人少だと、ことにこの本堂と來ては、夜は全く人氣がないのだから、そつと外からは本堂へ忍んで、そして此處へ出て來るんだらう、多分さうだらうと思ふけれど、これは想像だ、確と此處へ出て來られるか

來られないか、能く道筋を突止めて見たいもんだ「好うがす、直この外の方へ回つて來て、確な所をば覽に入れませうよ「けれど五八、今はまだ内分だ、お寺へお知らせ申したくはないんだが「なに、公然で行きやアしません、併し旦那、お寺の人が本堂に居やアしますまいか「さうだねえ、今頃は小僧がお掃除に來て居るかも知れない」と言ひながら、彦左衛門は懷中時計を見て「いや、もう十二時だ、お厳しいお寺で、ば飯の時刻がきちんと十二時にまだお掃除が殘つて居るにしても、もう食堂へ行つて居る、それは大丈夫だが、どうしてば本堂へ入る積だ「なに、譯はありません、直です」と言ひさしも、五八は下りて釘抜を腰に挿し、横の板塀を苦もなく攀ぢて、ひらりと墓場へ飛下りて了つた

彦左衛門は地袋の中へ首を突入れ、待構へて居る間もなく、例の襖壁の外で、ぎつと小い音が爲たかと思ふと、高い所でごろ〳〵と響が爲て、同時に襖壁が上へ上つたので「やア明いた」と思はず叫んだ

五八は短い階子の上から首を出しながら、一本の釘を示して「旦那足でげす、是一本打つた爲に、この奥の院を見透かされるやうになつたんでげす、まア此處をば覽なせえ、この階子が掛つてるのは、本堂の後堂の押入の中でげすよ「成程、さうだ「そして今ごろ〳〵と音が爲ましたらう、あれでげす」と上の方を指して「暗くつて能くは見えませんけれど、彼處に車があつて、石は此處へ下りて居ます、今この襖を二尺ばかし上げたんで、この石が二尺ばかし下りたんでげす「なアる程、旨く選つたもんだねえ「どうでげす、五八が言つた通りでげせう

彦左衛門は一言もなく、只呆に呆れて了つて、其處等邊を眺すばかりだ

第四十六

彦左衛門はやがて首を捻りながら「己はこのお寺の檀家で、始終參詣するのだから、此處に押入のある事は知つて居るが、中の樣子は少しも氣付

かなかつた、若や始めから斯ういふ建方になつて居て、先代の御隠居様が、此處から往來をなすつて居らしつたのか知ら、五八、この仕掛は何日頃出來たもんだらう」五八はイ細に改めて見て「階子は古い奴を持つて來たんでげすが、この襖は新しうがすよ、此處だけ壁を切抜いて了つて、こんな細工を遣つたんで、一年經つか經たねえかでげせう「はゝア、それでは初音がこの家へ來てからの事だから、彼奴の旦那が巧んだんだ、併しいくらは人少のお寺でも、忍んで來る奴が大工を連れて來て、こんな大層な事を遣らせて居るのを、お寺でお氣付きなさらないといふのも、少し理屈に當らないやうだ「さうでげすとも、誰にも知らせねえで出來る仕事ぢやアありませんや「若て見るとお寺も承知……

いや〳〵、まさか僧正様や妙観様が、こんな不都合な事を承知なさる筈がない、是は玄道さんが抱込まれて、あの人だけが知つて知らない振で……大方そんな事だらう、併し初音の旦那といふ奴が、何故こんな事をする必要があるんだか、それ

は些と知れ難ねるが、まア何にしても怪物の業ではなかつた、ねえ五八、お前も今朝家へ來て言つた通り、死骸の事だけは分らないが、日下の娘の消えたのは、初音の旦那がこの抜道から何處かへ連出したので、また多佳、いや、もう一人の娘が姙娠したのも、其奴が此處から通つて來て孕ませたんだ、其處でまた分らない事が起つて來た、怪物の業でないとすると、夜中にこの家が震動したのは何故だらう、加之も三晩も續いて「成程、左様でげすなア「昨夜の音だけは明白に分つて了つた、ねえ、大工に腰を据ゑて調べられては險呑だ、この襖壁を怪しまれて、明けて見られては大變だからと、明かないやうに釘を打つたんだが、餘り小くもないこの家が、音を立てゝ搖れたんが分らない「ぢやア旦那、物は試だ、一番遣付けて見ませうよ、人の力で搖れるかも知れませんから「そ、それは兎ても「いえ、下の方なら無効でげせうが、二階へ手を掛ける所がありせへしたら……丁度此處にこの柱がありますから、さア、旦那、遣りますよ「え、もう遣

るのか

五八は階子の頂上へ上りながら、地袋の後の隅にある柱へ手を掛けて、滿身の力を入れつゝ押引すると、家は心のまゝに搖れ出した

「あ、五八、是だ、全くこの通の搖れ方だつた「はゝゝ、矢張し私の盲つた事が當りました「全く當つた、實に爭はれあいもんだ、その道々で、すぐ斯うと察しる所が感心だ、ぢやア矢張り己にも長く居られては覺られると思つて、追拂ふ積で、今お前が爲た通りに、階子の上からさう遣つて動かしたんだ、憎い奴だ「ほんとにさ、人を馬鹿にしてやアがるぢやアがアせんか「だが何だよ、こんな小供だましのやうな嘘に乘つて、懷へ上つて、到頭四谷へ逃げて歸つたんだから、實は此方が馬鹿だつたんさ、何故其處へ氣が付かなかつたらう、併しこれで震動の種も上つた、分らないのは死骸が無くなつた事だけだが、これも同じ奴の爲業かも知れない

この時ふあい屋姿の爲吉が、不似合にも車に乘つて出て來た、達左衛門

へ用があつて來たらしいが、今にまだこの家へ入るのが無氣味と見えて、門の外から「旦那、佐々樣の旦那」と大聲で呼立てた

第四十七

五八の妻が段階子の下から「旦那樣、誰か外から貴君をお呼び申して居ますよ」彦左衛門は首を傾けて「誰だらう、今下りるから、家へ入れと言つて下さい「いえ、さう申しても入らないんでございます「變な奴だね え、ぢやア行かう」と彦左衛門は早速下りて、上口から門外を見遣り「おい、お前は爲吉ぢやアないか、何故そんな所に居るのだ、成程、ふあい屋の裝を恥ぢてだね、そんな遠慮が入るものか、何か用があつて來たんだらうが

爲吉は「へい」と言つて腰を屈めた「ぢやア此方へ入らなくつちや、ぜ處では話が出來ないぢやないか　爲吉は遂に怖々入つて來た

「奇體な男だ、直に入れば好いのに、時に故々此處へ來る位だから、何か變つた用だらうねえ「へい、あの何を見付けましたんで、そらこの家に居た御新造さんを「えッ、それは好い事を爲てくれた「心當があつたら言つて來いつて言ひなすつたから、道端へ肥擔桶を打遣つといて、大急で四谷へ行くと、旦那が居なさらねえもんだから、丈助とかいふ人に話したんだが、この事なら早くお耳へ入れてえから、柵厳寺裏の家へ行つてくれろ、旦那は彼處だつて言ふんさ、だが己は、いや、私はこの家へ來るのは氣味が惡いから……「はゝア、お前はそれで入り難ねて居たんだね、成程、酷く臆病な男だ」「私はさう言つて謝絶つたんだけれど、お前が直々話してくれる方が好いんだから、是非行つてくれろ、その代に車に乗せて遣るからつて……「ひゝ、それで車に乗つて來たのか、それは好かつた、好く言つて來てくれた、實はね、不思議な事が今色々分つて來た所で、今日までは知れなければ知れないで好いと思つて居た初音だけれど、急に尋ね出さなければならない用が起つて來たのだ、斯ういふときに丁度お前が見付けてくれたのは、實に有難い、まことに好い都合だつた、併しどうして何處で見付けた「今朝ね、毎日の通り早くから瀧の川を出て、音羽の方へ掛つて、それから小日向の水道端町へ曲つて、おあーいッと言ひながら歩つてると、彼處の寺から呼込みました「成程「それで私は何心なく門を入ると、まだ年の行かねえ小坊主が、この垣根に付いて奥の方へ行つて、突當を右へ曲つて、また右へ曲ると、便所があるから、彼處のを取つてくれろ、昨日から外へ流れ出して居るんだからと……

彦左衛門は顔を皺めて「やア、こりやアどうも美しいお話だ」爲吉は平氣なもので「さう言ふもんだから、言はれた處へ行つて見るてへと、障子の閉つた座敷の前に便所がありましたが、成程、道まで流れ出して居やアがるんで「まアそんな事は好い加減に飛ばして了ひな「へい、それからみんな汲取つて了つて、肥擔桶をしやうと思つた時、座敷の中で女の奴が、

何だか臭えやうだ、おあい屋が來てくれたんか知ら、て言アがつて、すつと障子を明けました「成程、それから「それが旦那、この家に居た御新造さんで「ひ、さうーか、併し念の爲に聞くが、よもやお前が見違へたんぢやアなからうね「どうして、一旦殺されたと思つてたんが、生返つて來た人ですもの、忘れやうたつて……、好し、それなら大丈夫だ、何しろ能く見付け出してくれた、こんな嬉しい事はない、これと言ふのもお前がその家業をして居るからで、全くおあい屋樣のお蔭だ、はゝゝゝゝ

第四十八

彦左衛門は詞を續けて「併し爲吉、それは水道端町の何といふ寺だ」爲吉は首を傾けて「さうですなア、何て寺だか……門の上に青く塗つて金で字を書いた額があつて、そして門の前の兩側に、大きい銀杏の樹と松の樹とのある寺でしたが「ひゝ、それなら分つた、この楞嚴寺樣の御法類で、甘泉寺といふ寺だ、あ、さうだ、初音が甘泉寺に居るとすると、彼奴の旦那もまた分つた、その寺の和尚がさうだ、ひ、それに違ひない、楞嚴寺樣に御法筵に列るから、己は能く和尚を識つても居るし、また噂も聞いて居るが、此方の僧正樣や妙藏樣の、お身持の正しいのとは大違で、大變な墮落坊主ださうだから、あの坊主がこのお寺の勝手を知つて居るのを幸に、初音を此處へ住まはせて……

「そんなこつてげせう、相手はその坊主だ」と五八が不意に後から言つて「おう、お前は何時の間にか下りて來て聞いて居たのか、ねえ五八、この事件に就いちやア、久しく惱まされて居た代に、一つ抜道のあつた事が分り出すと、何も彼もみんな一時に分つて來た、斯うなつて見ると、この事だけは分らないと言つて居た死骸の事も、矢張り分つて來るかも知れない、時に爲吉、その初音――新御造さんたい一人だつたか、傍に誰か居たらう「へい、障子を明けた御新造さんの後から、顔を出した奴がありましたつ

け「さうだらう、それが旦那だ、甘泉寺の和尚だ「いえ、髭のある女でした、美しい新造さ「はア、それは少し當が違つた、近處の娘でも遊びに來て居たんだらう、いや、待てよ、甘泉寺の和尚が初音の旦那として見ると、それは日下の娘かも知れない、あの娘が居なくなつたのも、もう一人の娘が孕んだのも、みな初音の旦那の仕業なんだから、初音が其處へ夜逃を爲て行くまでに、坊主が日下の娘を連れて行つてたんだらう、そして爲吉、先方がお前の顏を知つて居たか「いえ、少しも知らねえ風でした「そりやさうだらうねえ、何しろ魚屋の小僧で居た者が、今はおあい屋になつてるんだから——餘り變り過ぎてるんだから、如何にも先方は氣付かなかつたらう、お前も口を利かなかつた歟「へい、夜逃をしたつて言ふはどだから、私が聲でも掛けた日にやア、御新造さんが離かに喋られたら大變だと思つて、すゝまた逃げるかも知れねえと、私は知らねえ振で出て了ひました「嘆い、お前にしては感心な出來だ、能く其處まで氣が付いたよ、だが先方は

油斷のならない奴だから、お前の方では先方が知らないで居ると思つて居ても、彼方はすぐ働付いたかも知れない、働付いたとすると、逃足の早い女だ、また外へ逃げて行くかも……

「だから旦那」と五八は傍から「早く行つて、取抑へねえぢやア可ません や、相手の男は其處の坊主に違へねえにしろ、その女を取捕めへて、其奴の口から言はせねえぢやア……「さうだとも、さうでなけりやア坊主が承服しない、ぢやア直行かうが、己一人では逃げられる恐があるから、五八、お前も行つてくれないか「好うがす、參りませう「そして爲吉は證人だ、ねえ、お前も是非行つてくれろ、それから五八、表立つて玄關へ掛つて、初音に逢ひたいと言つた位ぢやア、兎ても逢はせる筈がないから、飛り込つたら、家宅侵入の罪を受ける覺悟で、爲吉を案内にして、すつと初音の居る所へ踏込む事にしやうよ「さうでがすとも

第四十九

やがて三人車を列ねて、小日向水道端町の甘泉寺へ走り付け、鶴吉の案内で、そつと門を入つて深奥く進み、首尾能く離れ座敷の縁側へ忍び寄つて、不意に障子を引明けた

其處に二人の女が居たが、果して初音と嵯子とで、彦左衛門の顔を見るより、共にはつと色を變へて、轉ぶやうに逃掛けた

彦左衛門は忽ち五八に目配をしながら、用捨なく座敷の中へ踏込んで、物も言はないで躍り掛つて、難なく初音を取押へた

五八も同時に躍り掛つて嵯子を抑へ「旦那、旨く行つたぢやありませんか」「さうだ、旨い工合に行つた」と言ひながら、引据ゑた初音を睨んで「おい、お前は實に不埒千萬な女だ、己が今日圖らず、此處にお前と若い新造とが居ると聞いて、その新造は嵯子さんかも知れないと思つたが、それがいよ〳〵嵯子さんだつたからは、妾の存じない内に二階でお消えなすつた

と言つて居たのは、眞赤な嘘だつたに相違ない、また多佳子の姐振の方もさうで、お前が相手を知らない譯がないんだから、もう何も彼もみんな白狀して了ひな、身持が正しいやうに見せ掛けて居て、實は坊主の妾になつて居た事も……

初音はぎつくり驚いた

「……またあの家の二階に抜道のあつた事も、みんな種が上つて了つて居るんだから

初音はまたぎつくり驚いた、嵯子はぶる〳〵慄へながら泣出した、彦左衛門は詞を切つたまゝ見詰めて居る

初音はぢつと考へて居たが、決然として詞たしかに「佐々様、もう是非がございません、其處まで詳しくお調になつて居りますのなら、隠しましても無効でございますから――實は何日か顯れるに相違ない、いつそ其筋へ自首して出やう、とまで思つて居たのでございますから、只今こゝで慄

よく殘らず申上げて了ひませう、貴君が仰しやつたお詞の通り、妾はお僧の妾でございます、併し……梵妻などになつて居りますのは、恥しい事は恥しうございますが、何も世間に類のない事でもございませんから、强ち深く隱すにも及ばないのでございます、けれど何分旦那と申す方が、御存じの通り、生如來とまで言はれて居らつしやる方でございますから……

彦左衛門は變に思つて首を捻つた

「……妾へ詳う〳〵仰しやいまして、能く注意をして人に覺られるな、萬一私に妾のある事が世間へ知れたら、今まで輝かしたこの身の落が、一時に褪げて了ふばかりではない、遂には檀家や信者に疎まれて、この栴檀寺を開かなければならないやうにも立到るのだからと……

彦左衛門は思はず「えッ」と驚き叫んで、詞忙しく、「ぢやア何か、お前の旦那といふのは、あ、あ、あの、あの僧正樣ッ

初音は案外の面持で「ぶや、ぢやア貴君は御存じなかつたんでございま

すか「えゝ、だ、誰がそんな事を知るものか、已はこの甘泉寺の和尚が旦那だらうと思つてたんだ、それにまア有らう事か、あの僧正樣が「へえ——、左樣でございましたか、坊主の妾になつて居る種が上つたと仰しやいましたから、妾は秘密を能く御承知の事だと存じまして、つい何でございましたが、それならお明し申すのではございませんでした、併し妾が慌てゝ服違へて了ひましたのも、これも天命でございませうから、今更悪びれて隱しはいたしません、明白に懺悔いたしませう

迷信家の彦左衛門は、今初音が何を言つて居るのやら、少しも耳へ入らないのだ、身命を捧げるまでに歸依をして居た諦翁僧正の不身持に呆れて了つて、たゞ〳〵我が愚を我みづから嘲るばかりなので

第五十

初音「懺悔いたします事柄は、一つや二つではございませんから、最初

から願を退ひまして、あの家へ入つた事から申しませう、妾は先に御徒町に居りましたが、僧正様が、私が通つて來るのも大儀だし、また通つて來るのを人に知られても大變だから、丁度寺内のあの家へ引越して來てくれろ、表面は貸家といふ事に爲て置くから、お前は借人のやうになつて來い、私に工夫があつて、二階の地袋の壁を抜いて、内々本堂から通へるやうにすると仰しやいますので……

彦左衛門は今なほ呆れ顔して居たのだが、またもや呆れて「ぢやァあの抜道は僧正様、いや、墮落和尚の細工か、成程、自分の木像を刻んだり、棚や壇を拵へて、手器用なもんだから、あんな事を思ひ付いて、待合じみた事をしたんだね、いや、ます〳〵愛想の盡きた坊主で「それで妾が貴家へお借り申しに參つたので「實に怪しからん事だ、已に差配になつてくれろと言つて、妾ゞるひの道具に遣つて居たのだ、併し差配を頼んだのが妙謎様だが、ぢやァあの人も師匠の秘密を承知で居たんだね「承知どころで

はございません、この蝶子さんをお口説きなすつたのはあの方で「えッ、ぢやァ蝶子さん、お前さんの相手はあの美僧の妙謎か

蝶子は顔を覗かれて眞赤になつた

初音は詞を續けて「お話が前後いたしますから、蝶子さんの事は後へ回しまして……妾が引越して參りました日に、魚屋の小僧が死骸を見たと申しましたのは、實は眞の事でございます

爲吉は傍から突然に「そら見ろ、どうだ、言はねえこつちやァねえ」と勢よく罵り付けた「おや、お前さんは今朝のおあい屋だが――お前さんが妾のこの隱れ家をお知らせ申したんだらうが、成程、あの時の小僧さんだつたねえ

爲吉は勝誇つたやうに頷いた

彦左衛門「ねえ爲吉、やう〳〵お前の顔が立つた、もうそれで本望だらう」と言つて、初音の方へ「時に殺されて居たといふのはどうした女だ「お

由と申して、矢張り僧正様のお妾で「おや〳〵、あの年になつて二人も妾を……呆れた淫亂坊主だねえ、併し誰が殺したんだ「お由は大變な嫉妬家でございまして、妾の僧正様のお傍へ引越したのが忌々しいと申して、妾が魚屋から歸つて來ました時、大層怒つて參りまして――あの抜道をどうして知りましたか、大きい聲で素破抜きますから、これは大變だ、僧正様のお身の上だと存じて、その事ばかりは内分にと頼みましたのに、なま〳〵大聲で喚き立てゝ、遂に帶の間から剃刀を出して、斬付けて參りましたから、妾もゝうこれまでだと――少しは心得もございますから、その剃刀を引手くりまして、反對に斬付けて、到頭斬倒したのでございます「ぢやァお前が殺したのか「殺す積でもございませんでしたけれど……「何にしても驚いたねえ、靜岡縣の士族だと言ふから、腕に覺があるかは知らないが、怖ろしい女だ、そして死骸はどうして了つたんだ「丁度とゝめを刺しました時、その小僧さんが參りましたので、妾は灯光を消して隠れました

したが、死骸が入口にあるのですから、見付けられるに相違ないと、大層心配いたしました、併し小僧さんが逃げて歸りましたから、早速抜道からお寺へ參つて、僧正様に御相談を申しますと、それは大變だ、今の内に隠して了つて遣らうと仰しやつて、妙譜さんや玄道さんを連れて來て下すつて、血が沁みて流れ出さないやうに、大きな段通で死骸を幾重にも包んで、あの家の二階へ上げて、抜道から御本堂の後堂へ下して、假りに彼處へお隠し下さいましたので……

「驚いたねえ」と彦左衛門はまた同じ聲を重ねて「俗人の己でさへ、手を消めなければ入らない御本堂へ、死骸を隠して置くなぞとは、餘りの事で物も言へない、ねえ五八「實に亂暴でげすなァ、そんな無法な事になると、素人よりは坊主の方が烈しいんだから、呆れ返つ了ひました

第五十一

彦左衛門は初昔の方へ向直つて「死骸はさうして取隠したにしても、入口の土間が血だらけになつて居たらうが……」「それでございます、何しろそんな事はないと言張る積でございますから、血の垂れた土を掘取つてお寺へ隠し、お寺から新しい土を取つて參つて、地あらしをして、土の新しいのが目立たないやうに水を流して、そして上口の板間へ付いた血も拭取つて、其處へも水を掛けて――丁度引越して參つた日でございますから、大掃除をいたしたやうに見せ掛けたのでございます「行屆いたもんだねえ」「併しまだ安心が出來ません、何しろ魚屋から訴へて、巡査が來るに相違ない、その時寺の方まで調べられては大變だから、死骸を後堂に置いとく事は出來ないが、併し遣り場がないからと――妾が出て參つた後で、お三人で御本堂の床板をお上げなすつて、下の土を深く掘つて、知れないやうにお埋め下すつたさうで「あゝ、ます〳〵呆れ果てた坊主共だ、罰あたりの木兎入め、尊い御本堂を何と心得て居るんだか……併しお前は何處へ

出て行つたんだ」「妾は藏前へ弟を呼びに參りました、實は僧正樣と二人で喰べます積で、魚屋へ二人前のお肴を誂へましたが、蟻の穴から土手の崩れる譬の通り、萬一こんな事から、僧正樣と申す旦那のある事が顯れてはならんから、その事を調べられた時は、一人前は手傳人へ取つたんだが、その人は歸つて了つたと言拔ける覺悟にいたしました、けれどこの小僧さんの參つた時、灯光を消したんでございますから、妾が家に居る事にしては不都合で、それゆゑ不在中と見せる爲に――藏前まで行つて居たといふ證據人に、わざ〳〵弟を呼びに參つたんでございます、その効がございまして、妾は少しも疑はれないで、死骸の事は畑のやうに立消になつて了ひました」「それが爲に馬鹿を見たのは爲吉だ」「妾も心では氣の毒に思つて居たのでございます、時に今度は下女の事で、何分僧正樣が毎晩二階へ入らつしやるのでございますから、少しも氣取られないやうに、ぼッとした者を望んで居りますと、丁度耳の遠い婆やが來てくれましたから、まづ氣取られる

心配はございませんでした、けれどあの妙蹄さんが、毎日中に抜道から遊びに入らつしやいますので、それには大きに困りました、たゞ遊びにだけなら何でございますが、何日の間にかこの蝶子さんとお通となさいましたんで、そんな事をして頂いては、御意見を申しましたけれど、此方が弱い所を抑へられて居りますから、強ひて喧しく申されませず、是非なくそのまゝにして居ります内、貴君が宅へ入らしつて、多佳子さんの御寄宿の事をお願になりました、外のお弟子は豊だけですから——それでも蝶子さんのやうな事が出來たんですから、寄宿をおさせ申しては、此方の秘密も覺られやうし、蝶子さんのやうな間違も出來やすいからと、無理にお願申しましたのに、遂にお連れなさいましたので、併しまだお年も行かず、お堅いやうにも見えましたから、この方なら安心だと存じましたのに、惡い事には染み易いものと見えまして、蝶子さんにお感化れなつて、遂にまたあんな事に……

「相手は「玄道さんで「えッ、あの小僧あがりの玄道「はい、玄道さんも妙蹄さんをお見習ひなつて、始終入らつしやるやうになりまして……

「や、どうも驚いた、聞けば聞くほどます〳〵驚く事ばかりだ、始めは多佳は怪物に孕まされたものと思つて、いくら心配をしたか知れなかつたが、まづ〳〵當り前の人間の腹で、少しは心配も薄らいだと思ふと、意外にもあんな小坊主と野合いて居て、遂に姙娠させられたとは、まア何たる不埒な女だらう」と彦左衛門は餘りの事に、五八や爲吉の聞く前をも忘れて、我が女の名を顯して悔みに悔んだ

第五十二

初音は後を續いて「もう少しでございますから、早く申して了ひませう、ある日二階の蝶子さんを呼びましたのに、お返辭がございませんから、變に思つて上つて見ますと、お姿が見えないのでございます、それで妾は、

妙蹄さんよりは蝶子さんの方がお逆せなすつて、お寺から居らつしやるのを待雖ねて、大勝にも妙蹄さんのお居間へ行らしつた事を覺りました、就いては妾がそつと出掛けて、叱つて蝶子さんを連れて來やうか、暫く待つて見やうかと考へて居ります内に、蝶子さんのお供の下女が二階へ上つて參つて、おや、お嬢さんが居らつしやらないと申して、喧しく騒ぎ立てるものですから、もう内々で呼びに參る機を失つて了ひまして、まアどんなに心を痛めましたか、遂にお消えなすつたと言はなければならんやうになりましたので……その時の妾の辛さを、どうかお察し下さいまし

彦左衛門は頷いて「成程、聞いて見ると、蝶子さんの事は、お前さんが悪いのではないやうだ「はい、それで實は妙蹄さんの方もお困りで、もう今更歸す事も出來ないからと、豫てお心安いこのお寺へ、蝶子さんをお預けなすつたんでございます、妾も蝶子さんの方はもう仕機がないけれど、せめて多佳子さんはそんな事のないやうにと、謹く御意見をいたした効もございませんで、はや御姓娠なすつて居らしつたんでございます、その爲に妾は貴君から度々責められまして、たいさへ申譯に困つて居ります所へ明日は貴君と日下さんとが御厳談に見える筈だと、そつと妙蹄さんから御内通がございましたので、もう此處には居られないと、俄に逃支度をいたして、道具は抜道からお寺へ蝶して、幸ひ蝶子さんが來て居らつしやる此方樣へ……「むゝ、さうでしたか、多佳の方もお前さんが悪いのではあかつた、全く多佳が悪いのだ、少し事柄は違ふけれど、私も悪い、あの寶僧共を生如來樣だの、お若いのに御感心だのと言つて、無暗に有難がつて居たんだから、實に大きな間抜だつた、何しろ蝶子さんや多佳の事を、みんなお前さんの所爲にして了つて居たんだが、事情を聞いて見ると氣の毒だ、併しこの儘に爲ては置けない、人を殺したり、死骸を隠したり爲て居るのだから、是非名乗つて出なければ——實は武沙汰になつては、多佳や蝶子さんの不埒も世間へ漏れるけれど、そんな勝手を言つて居る時ぢやア

ない、お前さんが先刻言つて居た通り、早く目首をするが好からう「はい、潔く名乗つて出る事にいたしませう「む、さうなさい、私へは名乗つて出ると言つて置いて、まさか途中から逃げる心でもあるまいが、念の爲に私が警察へ同道しやう「實は一人では何だか參り難ねますから、左樣にして下さいます方が結構でございます「ぢやア同行と極めやうが、もう一つ處置を付けなければならんのは蝶子さんだ、何れ多佳も同樣で、其筋へ呼出される事はあるだらうが、罪人ではないのだから、直樣日下さんへ送らせやう「どうか左樣になすつて下さいまし、日下樣の御老母へ、濟まない〳〵と存じて居りましたが、それで少しはこの心も休まります「ぢやア、五八お前氣の毒だけれど、入谷の日下といふ家へ送り付けてくれまいか、親に顏を合すのが面目ないからと、この新造こそ途中から逃出すかも知れないから、能く氣を付けて行つて、そしてこの事柄を詳しく話して貰ひたいのだが「承知しました「それから爲吉、己は今日中には王子へ行く積だけれ

ど、お前直に別莊へ行つて、奥さんへ見た通りの事を話してくれろ「へい荷があつちやア遲れますから、肥擔桶も車も打遣つといて、すぐ走り付けませう

やがて初音は彥左衛門に誘はれて、小石川警察署へ自首して出た

さて滔々たる迷信世界を瞞着して居た楞嚴寺の墮落坊主、老僧の諦翁も美僧の妙諦も雛僧の玄道も、數珠を持つ身が數珠つなぎになつて、その日の内に淺草警察署へ召捕られた

何

終

明治卅四年十一月廿八日印刷
同　卅四年十二月八日發行

著作者　武田頻
東京市日本橋區通一丁目十七番地
發行兼印刷者　青木恒三郎
大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷
印刷所　嵩山堂印刷部
電話西七八貳番
大阪市東區心齋橋筋博勞町角
發行所　青木嵩山堂
電話國東貳五〇番
東京市日本橋區通一丁目角
發行所　青木嵩山堂
電話國本局七八九番
勢州四日市堅町
賣捌所　嵩山堂支店

著作權所有
何
定價金四十錢

明治卅四年十一月廿八日印刷
同　卅四年十二月八日發行

著作者　武田頻
東京市日本橋區通一丁目十七番地
發行兼印刷者　青木恒三郎
大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷
印刷所　嵩山堂印刷部
電話西七八貳番
發行所　青木嵩山堂
大阪市東區心齋橋筋博勞町角
發行所　青木嵩山堂
東京市日本橋區通一丁目角
電話國東貳五〇番
賣捌所　嵩山堂支店
豫州岡山市竪町

著作權所有

何

定價金四十錢

新版廣告

一

涙六著　當世五人男のうち　上田力　全三冊　正價金壹圓　郵稅十八錢

涙六著　浪華名物男　全三冊　正價金壹圓　郵稅十八錢

露伴松魚合著　三保物語　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

涙六著　小說　やまと心　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

涙六著　小說　日本武士　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

涙六鮎陰合著　明治十年　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

奴之助著　配所の月　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

奴之助著　ちから草　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

水陸著　海の國男兒　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

奴之助著　小說　浮草物語　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

涙六著　赤蜻蛉　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

風葉著　武兄弟　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

風葉著　半元服　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

風葉著　小說　奇美人　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

奴之助著　怪物屋敷　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

水陸著　汽車之大賊　全一冊　正價金三十五錢　郵稅六錢

新版廣告

松葉著 女豪傑 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

水陸著 新俳優 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

松葉著 金剛武者 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

水陸著 水の魔術 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

水陸著 金剛石 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

水陸著 海水浴 全一冊 正價金三十五錢 郵稅六錢

美妙著 斷腸錄 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

仰天子著 小說弓矢八幡 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

奴之助著 彌生物語 全二冊 正價金六拾錢 郵稅十二錢

仰天子著 伊達若衆 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

仰天子著 源氏車 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

涙六著 原田甲斐 全三冊 正價金九十錢 郵稅十八錢

小說はるさめ 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

水陸著 過去の政海 全一冊 正價金三拾錢 郵稅八錢

本書は鐵腸先生小林及氏が數年二十三年未來記、國會開設前後、福澤諭吉ヲ記載ス

政治小說 落葉のはさよせ 全一冊 正價金三十錢 郵稅八錢

附鐵腸居士新聞經歷談

小說新版豫告

涙六著 三人兄弟 二冊

涙六著 浪華名物男 三冊

涙六著 五人男の內 倉橋幸藏 一冊

涙六著 五人男の內 川上三吉 一冊

涙六著 五人男の內 吉田雄藏 一冊

大澤天仙作 善道邪道 一冊

仰天子著 何 一冊

水陸著 空中飛行器 一冊

風葉著 戀無常 一冊

松居松葉著 女之義理 一冊

眉山著 神出鬼沒 一冊

奴之助作 不動劍 一冊

水陸著 新俳優 一冊

武田仰天子作 歌枕 一冊